
世界を壊せや勇者様 ~ world is broken a man of valour ~

翡白 翠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界を壊せや勇者様
world is broken
am
an of valour

【Nコード】

N9191W

【作者名】

翡白 翠

【あらすじ】

俺は昨日、前からずっと好きだった少女、朱里に告白した。OKをもらえて、最高にテンションがハイになっていた。なかなか眠れぬ夜も、終わり、何とか眠れた次の日、目が覚めるとそこは異世界だった……！？

異世界に転移されなくなかった主人公が世界を壊そうと反逆する！
主人公最強型超厨二復讐ファンタジー！！

一話、異世界に召喚されたら、そこには夢という名の肉（乳）があり……！？

目が覚めた。ここはどこだろう。前後の記憶が曖昧だ。目を開けた。目の前に見えるのは？ 乳、乳、乳。

「は！？」

俺は悲鳴をあげた。何故俺の目の前に巨乳があるのだろうか？

まったくもって判断できない。前後の記憶も曖昧なまま。記憶喪失なのか？ と、自問する。

「お目覚めですか、勇者様？」

目の前のデカ乳美少女が俺に聞いてくる。ふつうの男なら一目惚れしていただろう。並の男じゃなくても一目惚れしていただろう。人形のような端正な顔立ちに、スラっとのびた、長い髪。俺だつてきれいだと思う。だが、俺は、

貧乳派だ。

派閥ということで、自分の欲望は抑制できるものと、俺は今知った。グルツと周りを見る。ここは……石造りの部屋だった。石造りといっても、不思議なことにごつい雰囲気は全くなく、神秘的な感じがした。自分の下にある魔法陣もそう思わせる一因になっているだろう。ただ、

「ここはどこだ？」

俺が疑問の声をあげるような場所だというのは確かだ。神秘的だといっても魔法陣は魔法陣。オカルト的な感じがするといつてもいい。それと、目の前の美少女。俺を勇者様と呼んだ。その二つから仮定する。俺は異世界に転移された。または、ただ単に誰かのいたずら。その二つの可能性が考えられた。だが、冷静に考える。魔法陣と、今の俺の思考。どっちが非科学的か……

俺の思考だな。

「ここはどこだ？」

わからないならとりあえず質問。これまで16年だか17年だか

生きてきて、俺が得た結論だ。

「ここですか…… 帝国神殿ですね……」

帝国…… 帝国か。俺がもと居た地球という世界では、帝国なんて聞いたことがない。

「なに帝国だ？」

当然のことを聞いた。その前の名前がわかれば、地球…… のことなのか。それ以外の世界なのかがわかる。ドッキリという線は、目の前の美少女が着ている服。無駄に高そうな神官服。使い込んでいる雰囲気があり、なおかつ神聖で高そうだ。こんな服を用意するのは、一介の高校生にするドッキリとしては度が過ぎているだろう。

「ミルド帝国ですね」

そんなことも知らないのか。勇者様は。とても続きそうな調子で、美少女は言った。

「ありがとうございます」

感謝し、俺は立ち上がった。こんな場所にいる意味はない。俺は早くもとの世界に戻るんだ。

俺は歩きだした。早く朱里に会いたい。その一心で、俺は歩きだした。だが、美少女が止める。もう一度冷静になって周りを見渡すと、ほかにも何人も巨乳美少女が居た。貧乳は居なかった。残念だ。「どこに行かれるのですか？」

はじめの巨乳美少女に質問された。

「もとの世界」

一つだけ呟くと、俺はまた歩きだした。また止められる。そんなに俺と話したいのか。俺は話したくないんだがな。

「王様と謁見していただかないと……」

困ったように巨乳美少女は言う。さっきの服が神官っぽいから、エルフちゃんでもいいや。

「王様？」

と俺は聞く。王様が居る国なんていくつあるだろうか。無知な俺は地球の知識でもわからない。まあ、仕方ない。俺は無知だ。

「はい。王様です。勇者様を召還されたので、任務を頼みたいと仰っております」

勇者。任務。その二つのキーワードから連想されるもの……魔王。俺は魔王討伐の手駒にされるのか？俺は元の世界に帰りたいたいだけなのに。だが、王様と言うんだから、元の世界に帰る方法くらい知っているのではないだろうか。俺は考えた。

「わかった。行くよ」

十数秒後、俺はそう答えていた。

二話、反逆の狼煙を上げるのはこの部屋からでいいよねっ!?(前書き)

誤字や脱字を見つけた方は報告していただけるとありがたいです。

二話、反逆の狼煙を上げるのはこの部屋からでいいよねっ!?

巨乳エルフに連れてこられた先は、厳格な雰囲気がある、扉だった。無駄に沢山の装飾が施されている。成金趣味とは違った空気を持つ、気位の高そうな扉だった。

「この先か？」

俺は聞いた。この扉の先に、俺をこんなところに連れてきた張本人がいるのか？俺は迷った。この先に行つて、素直に魔王討伐の任務を受けるのか？わからない。とりあえず、後のことは後に決めることにした。

「はい。この先に王様がおります」

当然のようにエルフは答えた。

「入っていいのか？」

再度聞く。まあ、断られるわけではないだろう。

「はい、無礼がないようにしてください」

勇者より、王族の地位の方が高いのか。仕方がない。

「わかった」

そう言ってから俺は、扉を開けた……

空気が変わった。頭を全包围から刺すような空気。それが俺の頭上から発せられていた。やばいつ、俺は思った。呑まれる。この空気に呑まれたら、俺の自我はなくなる。直感的にそう思った。

「頭が高い!!!!!!!!!!」

宰相？ だろうか。背が高く、すらつとした雰囲気を持つ男が、言葉を発する。それと同時に、宰相らしき男の横にいた王が、こちらへ視線を……………

痛い。痛い。痛い。視線が痛い。気を抜かずとも、このままでは、呑み込まれる。痛い視線を受けた瞬間。思考すると同時に、俺は頭を下げていた。これは、やばい。

「そちが、今代の勇者か？」

王が聞く。

「はい、そうであります」

俺は答えた。呑まれそうになりながら、何とか、言葉を発した。

「そうか、魔王討伐を、【頼めるか？】」

グサツ、言葉の針が俺を貫いた。なんなんだろう。頼めるか？のところに、異様に力がこもっている気がした。魔王討伐のことなど、俺の頭から抜け落ち、この王の力ばかりに目がいく。そして、召還した勇者相手に威圧的な方法を取る王に従うことができるのか？

その疑問にたどり着いた。いいのか？ 従って俺は魔王討伐の手駒になっていいのか？ そして……魔王討伐にいったら、元の世界に……、朱里の所に、戻れるのか？

「つかぬことをお聞きしますが、」

俺は言葉を発し始める。なんだろう。一瞬部屋の中がザワツいた気がするが、俺は上から来る空気に対抗することで、精一杯だった。「なんじゃ、言うてみい」

若干挑発的な態度。俺はそう思った。挑発……しているのだ。この王は、勇者を挑発しているのだ。なんだろう、殺意？ が湧いてきた。

「俺が元の世界に戻る方法って、ありますかね？」

向こうが挑発してくるなら、こっちだって挑発し返してやる。挑発するような口調を入れて、俺は言った。

「魔王でも倒せば、帰れるんじゃないのかえ？」

疑問に疑問で返された。ふざけたような口調。嘘か真かは、俺に判断できない。判断したい……。頭の中に真贋判定という文字が踊った。真贋判定>アリスイアブセマ<？やってやる。それと同時に、俺の頭の中に、文字が流れた。

「贋です」

そうか、と俺は一人うなづく。

顔までうなずいていたのだろう。部屋の空気が一瞬疑問の色に彩られた。

「嘘はいけませんね。王様？」

この人たちは本当に王様を尊敬しているのだろう。俺への敵意が増えた。そんな気がした。

「ばれてしもつたか」

笑いながら王様は言う。笑い事ですますなよ。と、俺は一人思う。「本当の所、前例がないのでわからないのじゃよ」

そう言う。真贋判定>アリスィアブセマ<。俺は脳の中でつぶやく。

「真です」

そうか、納得。ただし、この真贋判定>アリスィアブセマ<の効果条件がわからないな。もし王様の知識内で真なのか、この世界の知識内で真なのか。判断する方法はなかった。とりあえず真贋判定>アリスィアブセマ<してみる。

「判断が付きません」

答えることと、答えられないことがあるのは、わかった。

じゃあ、やるか。

「ありがとうございます。そして、

さようなら」

俺は最大級の敵意を持って言った。王様を警護する騎士が俺の所へ向かい、空気の棘は一層俺を刺し抜こうとする。

「《燃え盛る炎よ、空より出でし隕石よ合わさり、我が剣となれ、ケオメテオリティス！！》」

頭から流れ出るようにでてきた言葉。一瞬で魔法だと理解した。部屋の上から炎に包まれた隕石が降ってくる。周りにいた文官は弾け飛ばし、騎士の鎧を焼け焦がす。天助から降る隕石の数は続々と増えていき、地面についた瞬間に消える。弾けるような炎は床を焦がすことはなく、天井と床の間の空間だけを焦がしていく。

「ギヤアアアアアアアアアアfるdふあうdげ！！！！！！！！！！」

「！！！！」

謎の悲鳴が数々上がる。人を殺すことに、俺は心を痛めたが、魔法という人外を使ったことにより、不思議とそれは和らいだ。

「彼女と付き合い始めたばかりの人間を、召喚するんじゃないよ」

俺は吐き捨てるように言った。それを見、まだ死んでいない人々が俺を睨みつける。

「なぜっ、私のスキルが効かぬっ？」

王様は疑問の声を上げる。まだ死んでいないのか、と思い。

「《ミクロスフォティア》」

と、詠唱をする。俺の中の魔法力>マジアズイナミ<から小さき火がエネルギー体として出る。その火は誰にも触れないまま、王の心臓に近づき……弾けた。

「なっ！」

王の断末魔の叫びが部屋の中に響く。

「さようなら、愚しき王様>イリスイオヴァスイリヤス<」

そう俺は呟いた。辺りを見渡す。先程の巨乳美少女、エルフが見えた。

「どうだい？ 気分は」

俺は聞いた。

「なぜっ、こんなことをっ」

エルフは俺に聞いた。当然の疑問だろう。だが、
「質問に質問で答えるなって、親に教わらなかったのか？」

俺は相手の質問を無視する。エルフは今この状態で、死にそうだ。熱さのためか、顔を歪ませ、こちらを睨んでくる。

「こっちの質問に答える気はないのか」

先程の熱き隕石>ケオメテオリティス<の出力を強くする。

「熱いっ！？ 熱い！！！」

エルフが悲鳴を上げる。内容上俺の質問の答えに適した回答だ。
「そうか、」

俺は満足した。ついでに、先程の質問に応えようと思った。

「俺がこんなことをやる理由？ 当然じゃないか。俺の未来を奪った奴らへの、人外による復讐>エクズィキスイ<さ」

厨二的ワードを交えながら言う。そんな回答している間に、人々の生体反応は限りなくゼロに近づく。屍と炎と岩の山。その中心に俺は立つ。とりあえず、真贋判定>アリスィアブセマ<でこの部屋内の生存者の数を確認する。

「存在します」

「チッ！」

俺は舌打ちした。真贋判定>アリスィアブセマ<を使っても、生存者の数まではわからなかった。予想外に使い勝手が悪い。便利なのは事実だが。

「助けて……助けてください……」

エルフが、俺に命乞いをする。目障りだな。と俺は思う。先程王に放った魔法と同じ魔法を放つ。

「《ミクロスフォティア》」

小さな火が、エルフの心臓を焼き焦がした。

「さてと、行くか」

俺は部屋を後にした。

三話、とりあえず出ていく途中にした決意（前書き）

誤字や脱字があったら、報告していただけるとありがたいです

三話、とりあえず出ていく途中にした決意

王城……なのだろうか。先程のエルフが言うには帝国神殿、という場所を俺は後にしようとした。だが存外、俺に立ち向かうものは多かった。神殿の王がいた部屋。そこから出たときには、俺は兵士らしき人に囲まれていた。

「面倒だな……」

俺は一人つぶやいた。なぜ俺がこれほどの数を相手に殺し合いをしなければならぬのか。いつそ、この国全体に復讐しようか。

一瞬だけ、考えたことだった。だが、この国への復讐はこの世界への復讐へと、俺の頭の中で進化し、俺の心の中へ波紋を広げる。

「復讐>エクズィキスイ<か……」

俺はさらにつぶやく。そうしている間にも、

「この中で何があつた!? 今まであつた大きな物音はなんだ!?

「答えろ！ 勇者！」

うるさき兵士が、俺に尋問しようとする。そんな尋問中にも俺の頭と心の中は、世界に復讐をするか復讐をしないかで、徹底的な討論を上げていた。

「答える才才才才才才才才才才！！！！！！！」

兵士長……だろつか？ 一人装備が充実して、厳格な雰囲気がかに漂う偉そうな兵士。そいつが叫び声を上げながら、俺に向かってきた。両手にもっているのは……剣。

「同じ魔法ばかりでもつまらないな」

俺は一言余裕につぶやく。頭と心の中に入っていた復讐の問題は、とりあえず隅に置く。

「何を言っているんだアアアアアア！……！！！！！！！」

発狂しているような勢い。それを持ちながら兵士長は俺に突撃してくる。ただの兵士長が俺のような勇者様に勝てるわけがないだろうが。常識的に考えるよ。

「《地獄谷>コラスィキラザ<》」

兵士長が奈落の谷へ落ちていく。いとも簡単に兵士長を落とされたことに、兵士たちは驚きを隠せないようだ。完全に逃げ腰な兵士までいる。

「つまらないな」

俺は一言つぶやいた。煎餅の様な硬いものを食べたいのに、プリンを出されたような気分だ。

「《大きな地獄谷>メガロスコラスィキラザ<》」

兵士たちの多くを、奈落の谷が襲う。見たこともないような大きな呪文。見たこともないような効果の呪文。見たこともないようなニンゲンの呪文。それが兵士を襲う。兵士たちは抵抗することもできずに、殆どが奈落へ落ちた。地下三十メートルくらいだろうか。俺は勝手に予測する。まあ、三十メートルに埋まっているなら、誰か未来の人が掘り出してくれるだろう。

残った兵士が、

「仲間の敵！……！！！」

と言いながら、俺に剣を振るう。

「《堅き楯>スクリロアスピダ<》」

謎の透明な楯。それが兵士を遮る。

「俺のせめてもの慈悲だ。お前くらい生かしといてやるよ」

俺は完全な勝者の笑みを浮かべながら、兵士に言い放った。

「覚えとけ、俺は世界を壊す勇者>カタストロフィプロタゴニステイス<だ」

そう言い放って、俺は部屋の前を後にした。

清涼な風。それが俺を包んだ。CO2が少ない。現代の汚染された風とは違った風だった。

「清々しいな」

俺は無意識下で、呟いていた。清々しいと言っても、帝国神殿の兵士を何百人単位で殺し、王を殺し、文官を殺し、エルフを殺して

きた後だ。血の匂いは自分自身と背後から漂っている。前から来る世界の息吹。後ろと自分から漂う世界の末路。二つの匂いを浴びて、俺は決意を固めた。

俺は、世界を壊すんだ。

どうだっていいじゃないか。俺が生まれて初めて彼女ができて、人生が最高にハイだった翌日。無理矢理誘拐された世界。いうなれば、この世界は誘拐犯の家だ。誘拐から脱走したが、誘拐犯の家にとはとられた。ならば壊そう。この家という名の世界を……壊すんだ。

四話、街を探索しようとしたら見つけたものとは！？

神殿の敷地を抜けると、そこには街が広がっていた。活気があり、人々が群れる街。どの店でも、店先の売り子が声を張り上げ、奥の店主が金の計算をする。カランコロンと鈴の音が鳴ると、いらっしやーいと声が響く。なんて活気がある街なんだ。壊しておくにはもったいない。

壊すけどね。

だが、壊すと言ってもすぐ壊すとか趣がない。この人々が阿鼻叫喚の色に彩られるのを一人眺めるのは楽しそうだ。だが、もっと楽しみ方があるのではないだろうか？ 例を挙げよう。先ほどの神殿で、一番殺すのに燃えたのは誰だ？ 俺は自分の心の中に自問する。答え？ 決まっている。あのエルフだ。ほぼ同位くらいで、王様も燃えたが、あれは俺をこの世界に召還した張本人だからで、この世界に俺を召還した張本人はすでに一人もいなくなっている。召還の魔法を唱えた者なら、まだいるだろうが、それは上からの命令に従っただけであって、俺をこの世界に召還した張本人か？ と聞かれると、疑問符が浮かぶ。まあ、結論だけ述べると、殺したときに最大級の感慨というか感動を得られるのは、相手と親しかったとき。ということだ。かといって、親しすぎると殺せなくなるな……と考えた。

「どうすつかー」

前途多難だ。世界を壊すにも、ただ壊すだけじゃ飽き飽きとする。なにかアクセントが欲しい。親しくなってから殺すというのも、人間の感情ほど操るのが難しい物はないので、途中で世界を壊すのをやめにしようかな、と思ったら本末転倒だ。

そんな風に完全に殺人鬼な考えをしていると、街の中で、一つの店に目がいった。活気がある街の中、負のイメージを出し、鬱々とした空気が漂っている。先程俺が味わった、血と肉という死の空気

とはまた違う、絶望の空気だった。

「なんだ？ あれは」

勇者補正なのか、完全に文字は読みとれ会話はできるので、その店に目を凝らす……微妙に遠くて見れない。歩いていけばいいなと当然のことを考え、歩いた。そうして見えたのは……

「奴隷の店、エスクラブ」

奴隷店か。俺は興味を持った。一人で世界を壊す旅というのかもしれないが、いろいろ不自由はあると思うし、二人の方がいろいろ楽しいだろう。三人以上だと、また違ったデメリットが出てくると思うので、二人旅くらいがちょうどいい。多分異世界補正で、奴隷も大体は可愛いだろう。今、ざっと街を見ても、特別顔が……というような人はいないし。基本的に美女、美少女だ。多分奴隷も例外ではないだろう。やっぱ、旅の同伴をするなら美少女とか美女がいいよね！ というような低俗的な結論に、俺は至った。

カランコロン。俺は店のドアを開けた。

奴隷は店先に並べられていた。大体全員可愛かった。美少女と呼んで差し支えない。だが、アクセントとしては微妙だった。目に面白味がない。あるのは奴隷になったという諦めか、奴隷になっても逃げてやるという反抗か。その二つだけだった。

「どれかお気に召した奴隷はありましたか？」

店主が俺によって来る。奴隷で一儲けしたそこら辺の成金だろう。微妙だな。他はいるか？」

微妙、という言葉が出た瞬間、店主は一瞬イラッとしたようだった。だが、俺に購入の意欲があると見ると、一瞬で目の色を変え、商売人の目になった。商売………！？

俺、金持ってねえや。

五話、異世界通貨なんて持っているわけないだろ、常識的に考えて

奴隷屋の店主と歩きながら、俺は焦っていた。金がない。それは酷く滑稽だった。例を挙げるとするならば、トリアスロンを走りきった後、お祝いにちよつと奮発しようとして、イタリアンレストランに行ったら、財布を忘れたような気持ちだ。焦った俺を見かねたのか、

「どうかいたしましたか？」

奴隷屋の店主が聞いてくる。俺は非常に困った。

「すいません……ちよつと家にお金を忘れてしまいました……」

家に忘れたのはお金だけじゃないけどな。家族も思いでも、すべてを元の世界の家に置いた。

「大丈夫ですよ。今回は下見だけで、次回に買っていただくということでも、当店は全く問題ありません」

優しい店主だな、と思ったが、ここで帰しても店の信用問題だろう。一瞬で店主に対する態度を手のひら返ししながら、俺たちは歩いた。

ついた部屋の奴隷は、先ほどの部屋より、幾分か劣るような感じがした。顔だけ見るとなんら遜色がないように見える。なにが違ふのだろうか。それは……空気、言い換えると、雰囲気だった。

顔にあきらめの色がある。売り出し中ではないことを自覚し、売れ残りとして生活しているのだろう。売れ残りの行き先などろくなものではあるまい。

刹那、俺は何かが頭に入ってきた。それは、一人の少女だった。

顔は売り出し中の奴隷たちに勝るとも劣らない端正な顔立ちだった。元の世界にいれば、男の百人に九十七人が注目しただろう。そして、なんとも捨てがたいのが、この世界では思ったよりも少ない、貧乳……だった。

いや、俺が注目したのはそこではない。いや、貧乳とか、顔がいとかそういう要素ももちろん大切だ。重要だ。必要だ。だが、その目に移っている色は、諦めを超越した……絶望だった。

「その娘が気に入ったのですか？」

店主が商売用の笑顔を浮かべながら聞いてくる。

「ああ、まあな」

俺は曖昧な返事をする。

「その娘は上玉ですので、2万ギルですよ」

店主が言う。だが俺はこの世界に来てから一日も経っていない。

寝床も探さないとだし、腹も減ってきた。

「そうか、明日にでも金を持ってきて買うとするよ」

金なんて強盗でもすればいいだろう。別に早く死ぬか遅く死ぬかの違いでしかない。だが、俺の言葉を聞いて絶望の目をしていた少女はこちらへ敵意を向けているようだ。睨んでいる。丁度いい。絶望している方が俺の計画への賛同は得られやすいだろう。そう思いながら、

「じゃあ、ありがとうございます店主さん。明日また伺いますね」

そう俺は言って、店を出た。

店を出たとき、俺はどうするか考えていた。なにより金がない。そうだ、魔法が使えるなら、試してみたいことがある。そう考えると、いともたやすく頭の中で文字が踊った。

「《物質創造>イリコズイミウルギア<》」

頭の中を踊った文字を、俺は詠唱した。そうすると、

「おおおおおおおおお……！！！！！！」

なにもない空間から続々と一万円札が降ってきた。一万円？ この世界の通貨って円なの？ さっき奴隷屋の店主がギルとか言っていたよね。

俺は重要なことに気づいた。元の世界とこの異世界では、通貨が違う。そんなことにも気づけないとか、俺は相当のバカか。激しく

自己嫌悪。 まあ、仕方がない。 とりあえずこの世界の通貨を探すか。

六話、果実店（前書き）

誤字脱字があつたら報告していただけると助かります

六話、果実店

果実店。ちょうどいいだろうと思った。腹も減った。やっぱ飯屋か。悩むな。俺は商店街みたいなところを歩きながら悩んでいた。時間は夕食時。辺りは人の群れ。瓦版が騒いでいる。王様殺害？俺が殺したじゃん。

とりあえず、果実店に入った。夕飯時の飯屋で、個人的に頼みごとって、余程度胸がないとできないよな。

「すいません。お金見せてもらえますか？」

入ってすぐ、ノリで聞いてみたが、どう考えても不審人物だろう。店に入ってきていきなり金があるか聞く客。客観的に見れば強盗だ。金は見せてもらったほうが奪いやすいしね。

「なんでですか？」

完全に疑っているよ。当然だな。俺だって同じような人がいたら疑う。当然だ。どうやって金を見せてもらおうか。でも、異世界から来たなんて言えば、黄色い救急車を呼ばれてしまう。

「ちよつと、田舎の村から来てね。この街のお金のことを知らないんだ」

異世界に来たらとりあえず、田舎の村を出せばいいって誰かが言ってた！誰だっけ？細かいことは気にしちゃダメだね。

「街に入る時の入街税はどうしたんですか？」

意外と頭がいいぞ！こいつ！ぱつと見俺と同じ年くらいなのに、的確な対処をしてくる！ほかの小説の主人公たちはどうやって乗り切ったんだ！俺には無理そうだ！

「いやあ、不法入街？」

とりあえず疑問形で言つとけば……

「おまわりさん、こいつでーす」

「ちよつ！……！」

意外とひどいやつだな。

「ハハハ、軽いジョークだって、ジョークジョーク」

冷や汗をかきながら、俺は言った。くっ、金を見る方法が思い浮かばない。

「ジョークですか、そうですか」

何かを納得している。わけわかんねー。

「わかったよ！？俺がここから去ればいいんだな！？」

俺は自棄になって言う。

「いえ、お野菜や、果物を買ってくれと、ありがたいです」

買うのか……金がねーや。まてよ。目の前のこいつは女。女が好きなもの……宝石か！宝石でも与えれば、金くらい少しくれるんじゃない？

「ちよつと待つてろよ」

目の前の女が怪訝な目をするが、俺は気にしない。店を少し離れ、路地裏に入る。暗い雰囲気のところ。俺はそこで詠唱をした。

「《物質想像>イリコズイミウルギア<》」

母親の部屋にあった、ルビーを想像しながら詠唱する。少しすると、空からルビーが降ってきた。

「おっとお！？」

危ない危ない。ルビーを落とすところだった。なんとか、手中にルビーを納めたので、さっきの店に戻る。

「この宝石と、金を交換してくれ……」

俺は懇願するように言った。

「それなら、宝石商の店にでも行ってください」

そうだね。果実を売る場所で宝石が売れるわけないね。

仕方なく、俺は果実店を出て、宝石商の店に向かった。冷静に考えると、どんなお使いクエストだよって、思った。

七話、宝石店（前書き）

誤字や脱字があったら報告していただけると、ありがたいです。

七話、宝石店

宝石屋。見事な装飾に彩られていた。すげえな。金持ちだな。と、金がない俺は当たり前のことを考える。手には先ほどよりさらに増やしたルビー。合計4つほど。なぜ4つにしたのかは……疲れたからだな。普遍的なRPGと同じように、魔法を使うと、MPが減るらしい。といっても、大型っぽい熱き隕石>ケオメテオリティス<を十分ちよい使っていても、全く疲れなかったのだから、思ったよりMPは高いのだろう。いまでも少ししか疲れていないし。俺って結構チートだな。

宝石商の店に入った。カランコロン。どこの店の鐘の音だな、と、たわいもないことを考える。

「誰だね、こんな時間に」

宝石商だと思われる、太った中年男が俺に言う。冷静に考えればもう19時くらいだった。日は落ちている。ランプの明かりだけが店を照らしていた。

「少し宝石を買い取ってもらいたくて」

俺は正直に言った。ルビーを出す。

「できれば明日にしてくれ……と言いたいところだが、こんな時間にくるんだ。余程金に困っているんだろう。少々値が下がるが、即決で宝石を買い取っても良い」

上から目線だなあ、と俺は思う。だが、細かいことを気にしてはだめだ。俺は手に持っていた4つの宝石を、中年男に渡した。

「これか……」

なにも言わず渡したのを肯定と受け取ったのだろう。中年男は唸りながら宝石を鑑定しているようだった。

「ちよつと待ってくれよ……」

なんだろう、中年男が俺を制した。

「結構な上物らしい、魔法で鑑定するが、かまわないかね？」

魔法で鑑定できるのか。この世界は便利だな。その魔法を見れば、俺もその魔法が使える気がした。なんだろうか、俺に使えない魔法はない、そんな気がしたのだ。

「ああ、いいぜ」

俺のナルシスト的思考はおいておき、肯定した。魔法という便利なものがあるんだ。使わなくては損だ。使ったって、俺に損があるわけじゃあるまい。

「ありがとよ。最近は魔法嫌いが増えてねえ。魔法を使うことで下がる買い取り価格なんて微々たるものだし、魔法を使わないとこっちも安心して買い取ることができなくてねえ」

魔法嫌い？ 魔法が使えない人たちか？ と、俺は一瞬疑問に思ったが、魔法を使うのにも金を取るのだ。そう、考えると魔法も使える人と使えない人がいるのだろ。そして、今から使う魔法は店主さんにとって非常に信頼を置いている魔法だということもわかった。

「《宝石鑑定>ポリティミ・リソスアリスィア<》」

少しの静寂が入り、詠唱が終わる。宝石商は頭の中の情報を探るような素振りを見せた。すぐに探り終わったらしいが、探すような顔が終わった瞬間驚いたような顔をして、

「これはかなりのものだね！ 非常に純粋な宝石だよ！」

興奮するように店主は言ったが、宝石のことをいわれても全くわからない。続いて価格でも言ってくれるのだろ、俺は少し待った。「四つで4万ギル位かな…… 安く見積もっても」

安く見積もった宝石二つで人が一人！？ 俺は衝撃を隠せなかった。驚いた表情になったのを、店主が見て、

「驚くことはない。これはそれほどの価値がある宝石だ。僕が保証する」

太鼓判を押してくれた。個人的には魔法でチートっぽくだした宝石でここまで稼げるなど完全な予想外だった。

「売ります！！！！！」

俺が声を裏返しながらそう叫ぶのに、さほど時間はいらなかった。

八話、美食（前書き）

誤字脱字があつたら報告していただけるとありがたいです

八話、美食

喧噪。騒がしさで彩られているのは、飲食店……だった。飲食店といっても何が出るのかはわからない。ファミレスとも少し違う、謎の雰囲気を持つ店だった。繁盛はしていた。

「なんだ……これ……？」

俺は思わずつぶやいていた。本当になんなんだろうか。これは食べ物なのか？

俺は、旅するにはモンスターの肉くらい食べれるようにならないとな、と思った。そこでモンスターっぽいネオウルフの焼き肉定食を頼んだわけだ。それを頼んだときから周りの俺への視線が強くなった。なんだろう、勇者を見る目になった気がする。俺、そういえば勇者だな。

とりあえず目の前にある油でギトギトして、尚且つ無駄に焦げているこの肉、それにレタス、米。それを平らげなければいけない。肉からは不穏な空気しか感じ取れない。食べ物だとは思えない。

一口、俺は口にした。

至福

なんなんだろうか、言葉に形容できないような美味しさを、この肉は俺の口の中ではなっていた。俺がこの肉を食べて幸せそうにしたのを見て、ほかの客は驚愕と感嘆の感情を露わにした。

「よく、あんなものを食べれたな……」

なんて声まで聞こえる。だが、これは、どうしようもなく旨いだ。形容しがたいほどに旨いのだ。俺は訳が分からなくなる思いのまま、ご飯をおかずに、この肉を口に入れた、この美味しさを理解できないとは……ああ、いきる喜びの三分の一を失っているぞ。俺はそう思った。

冷静になってみると、何で俺は異世界に来てまでグルメ番組みたいなことを（脳内で）やっているんだろうと考えた。旨かったのが悪い。責任転嫁をした。食べ終わったので、勘定を払い、ごちそうさまと言ってから店を出る。俺に吹くのは少し寒い風。夜が来たことがわかった。

思ったより宿屋には人がいた。たとえるなら夕食時の回転寿司のチェーン店のレジ付近くらいの人が、宿屋の入り口近くにいた。繁盛しているなーと思いながら俺はレジみたいところに行った。

「一人部屋一つで」

まあ、一人だし。というか、隣に彼女連れてなくて悲しい。いるのに、彼女いるのに。

「はい、わかりました。いつからですか？」

「今日からで」

「ああ、すみません。今現在部屋が満室でして」

予約の客と勘違いしたのか。というか、こんだけ人がいるんだ、部屋が空いているならもつと少ないだろう。理由？俺にもわからない。

「ああ、わかりました」

俺は曖昧な返事を残し、宿屋を後にしようとした。いや、まてよ、俺はレジに戻った。

「この辺でほかの宿やってありますかね？」

ちよっと同業者のことを聞くのは失礼だと思ったが、背に腹は代えられない。いや、背に寝床は代えられない？わかんね。とりあえず、ベッドで寝たい。それだけだ。というか、この街を壊すとベッドで寝ることができなくなり、なおかつ野宿か。悲しいな。

「はい、向こうの宿屋>シエルシエルなんかがお勧めですよ。うちよりかなりお高くなりますが、サービスは整っています。あそこのサービスに追いつけ追い越せが、うちの目標なんですよね」

無駄な宿屋情報を俺に与えてどうしろと？ まあ、いい、感謝はしておこう。

「ありがとう」

俺はそれだけ言っと、宿屋をでた。次の宿屋では（かなり高かったが）部屋を借りれ、寝床の確保に成功した。こうして、俺の異世界での一日目は、幕を閉じた。

九話、購入（前書き）

誤字や脱字があったら報告していただけるとありがたいです。

九話、購入

二日目。この世界の日付って元の世界とどう違うんだろーと、二日目と思った瞬間に考えた。朝。窓から降り注ぐ日差しは、元の世界とは、何も変わらなかった。

「朝か……」

誰もいない部屋で、俺は一人つぶやいた。こんな時だからこそ思う、朝早く起きる習性がついていてよかったと、休日で昼まで寝てるような人間は、この世界では生活できないのかもしれない。野宿で襲われて死亡とか、誰でも嫌だ。

「どうするか……」

やることは何も決まっていなかった。そうだ、奴隷を買おう。前日から決まっていた。朝起きたばかりで頭がはつきりしてないせいかもしれない。そういえば、奴隷一人二万ギルって安いのだろうか……と、一瞬考える。そういえば、この世界の二万ギルって、元の世界のいくらだ？ と、俺は考えてみた。まず、昨日の飲食店だ。焼肉定食は、八十ギルくらいだった気がする。元の世界では、多分800円くらいだろう。宝石が一つ一万ギルというのは……元の世界で10万か、結構いいものだったんだなーって俺は思った。

え？ まてよ。そうすると、人間の価値って、二十万円！？

高いのか安いのかは俺には全くわからなかった。いや、それは元の世界で人身売買なんて、やってないからわからなかった。まあ、やっていたらどこの悪の組織の一員だ！？ みたいなノリになっただろう。やってないし。

二十万円という価値について、俺は何も感想を持たないことに決めた。こんなことなら中学の公民の資料集に載っていた某隣国の人身売買のところでも、しっかり見ておくんだな、と思った。というか、ここで人身売買や人の価格、その他もろもろについて考えていても、仕方がない。俺はあさの色々な準備をして、部屋を出た。

朝特有の清々しい風が吹いていた。少し伸びをする。そういえば、服も買わないとな、と、思う。少し旅の準備をしてからじゃないと、この街は、

壊せないよな。

なんでもない日常の一部。俺はそう思った。もう引き返せないところにいるのかもしれない。今まで殺したのは何人だろうか？ 唐突に思い至る。まだ三桁はいつてないよな、と、特に何でもないように思った。

「さて、行くか」

俺は一言そうつぶやくと、奴隷屋に向かって歩き出した。昨日の絶望の少女を買いに行こう。なぜだかはわからないが、俺はとても胸が高鳴っていた。

カランコロン。奴隷屋の扉の音が鳴り響く。

「いらっしやーい」

条件反射的に発された、店主の音が響く。

「おう、あんたかいな」

昨日あったからだろう、多少親睦性は増えていた。

「おう、昨日の少女はまだいるかい？」

俺は聞いた。

「ああ、居るよ」

店主はそう答えた。まだいるのか、よかった。俺は瞬間的にそう思った。だがなぜ、俺はあの少女にここまで惹かれているのだろうか？ そんなことを考えた。だが、すぐにその考えを改め、そんなことはどうでもいいじゃないか。強いてあげるならば、貧乳だから、ついでに絶望の目。それでいいじゃないか。結論を出した。問題ない。

俺と店主は昨日と同じように、歩いた。カタカタカタ。地下へ降

りる、階段の音が聞こえる。奴隷といえば、地下だろう。なぜかはわからないが、俺はそう思った。

辺りを見渡す。見つけた。昨日の少女だ。絶望の色は……薄れた？ 薄れた。俺はその少女の絶望の色が薄れたことを、認識した。だが、なお強い絶望の色。吸い込まれそうな瞳。俺は、その少女に夢中になってた。まあ、貧乳だからだよな。一人納得した。

「彼女でいいのかい？」

店主が俺に聞いてきた。

「ああ。問題ない」

俺は答えた。

「そうかい」

そう店主が言うと、少女の行動範囲を圧倒的に狭めている檻の鍵を外し始めた。少し経ち、

ガチャッ

檻は開いた。少女は世界に出た。閉鎖された空間を……脱出した。

「奴隷の服従魔法はどうするかい？」

店主は聞いてきた。なぜだろうか。自分でできる気がした。

「自分でやるんでいいです」

そう俺が言うと、

「そうかい、」

店主は答えた。少し物珍しそうな目をして、

「じゃあ、勘定をお願いしますね」

俺はがさごとカバンの中から袋を出した。なかには金貨が入っていた。多分金貨一つで一万ギル。銀貨は百ギル、銅貨は一ギル。昨日の宝石商や飲食店の経験で、俺はそう、予想を立てた。

「これだ」

俺は無愛想に答え、金貨を二枚渡した。

「こっちに来い」

俺は少女に、そう言い、少女と一緒に奴隷屋から出ていった。

十話、奴隸と会話（前書き）

誤字や脱字があったら、報告していただけるとありがたいです。

十話、奴隷と会話

さて困った。この少女と奴隷屋を出てきたんだが、ゆっくり話す場所が何処にもない。歩き回ってもこの子は逃げそうだから手を離せられないし。

そうだ！ 奴隷にする魔法がどーたらこーたらって、奴隷屋の店主が言っていたな。どんな魔法なんだろう？ と、考えた。瞬間、頭の中に文字が踊った。

「《奴隷契約＞スクラヴォスインヴォレオ＜》」

踊った文字を流暢な口調で話す。する、と横の少女がビクツと一瞬ふるえた。

「どうした？」

俺は聞いた。頑固なのかこの少女は、俺に買われてから一度も喋っていない。強情だなあといいながら、俺はこの子が喋るのを歩きながら待った。

だが、十数秒経っても喋りそうもない。少しくらい脅すか。

「【言ってくれよ、お願いだからさ】」

何だろうか、言葉に強い力が込められた気がする。まあいいか、どうせ話さないだろう、と思ったが、

「奴隷契約をされた気がします……もしされていたら、もうお嫁にいません……」

少女が喋った！？ 頑固な少女が何故喋ったのか、俺にはわからなかった。少女自身も

「え……？」

と言いながら、怪訝な顔をしている。力を込めて聞けばいいのか？ 俺はそう思った。

「【奴隷契約ってなんなの？】」

俺は聞いた。また力が込められている気がした。

「私の知っている知識では、奴隷が主人に逆らわないようにするた

めの魔法だと聞いています。たとえば主人が命令を出したら、できる範囲で絶対服従だとか……」

そうか、いいことを聞いたぞ。

「なるほど……」

俺はつぶやいた。たぶんさっきの二つの言葉には、俺の『命令』が含まれていたんだろう。だから俺の質問に拒否することができなかったんだ。俺は納得した。

「【私はご主人様の従順なる犬ですって言うてみて】」

「私はご主人様の従順なる犬です」

言った後少女は、はっ……！？ とした顔になって、それから顔を赤らめた。これは面白いぞ、と俺は思った。

「ふつうに受け答えしてくれる？」

命令を入れないで言うてみた。

「仕方ないですね……」

微妙に反抗的な態度だが、これ以上刃向かってもなにをされるかわからないと思ったのだろう。普通に答えてくれた。

「じゃあとりあえず……どっかで君の生い立ちとかいろいろと、俺の生い立ち……はいらないな。どんな存在かと、目的を話そう」

そう俺が言い、

「【着いてこい……後ついでに、俺から離れるな。大体……まあ、少し探せばわかるくらいの距離な】」

そう俺が言うつと。

「仕方ないですね……わかりました」

渋々頷いた。

「じゃっ、どっか……公園でも行くか！」

そう言うて、俺は走り出した。仕方なしといった感じで、少女は着いてきた。

十一話、服とか

まあ、金は後一万五千ギル以上あるし、問題ないだろう、と思った俺は、奴隷と一緒に微妙に高そうな飯屋を探した。だが、高そうな店はなかった。普通に考え、王族や貴族はお抱えのコックが居るんだろうなと、納得した。

「どこで話す？」

俺は観念して聞いた。いや、三十分くらい歩くのに疲れた。段々と奴隷少女が不機嫌になってくるのが手に取るように分かったので、仕方なしに聞いた。

「私はこの街を回ったことはありません……ですが、普通の人のご飯を食べながら話せるようなところなら三十分回っている間に五間ほど見つけました」

すげーな。うん。

「よし！　そこで一番雰囲気がよくそこそこに行こう！」

どこに失言があったのだろうか、この発言をした直後、少女は途端に不機嫌になった。

「常識的に考えて、奴隷屋の奴隷っぽい服で入れる食べ物屋さんがあったら、私が聞きたいですね」

「服屋に行くか……」

俺が観念したようにつぶやくと、少女はとたんに機嫌が良くなり、「はい、わかりました！」

と、スキップしながら言ってきた。俺の財布大丈夫かな……

服屋についた。少女は嬉々として入っていく。

「お前はこないのですか？」

「俺は服屋は苦手だからいいよ。ついでに俺のも買っておいでくれ。ネタで買ってきたらおしおきするわ。てか、お前って言うな」

「わかりました。鬼畜くんって呼びますね」

「もつとだめだ。ご主人様と言え」

目の前の少女がえーみたいな顔をする。

「名前で呼んじゃダメですか？」

「ダメだ。名前は下の世界に封印すると、昨日の夜に決めたんだ」

目の前の少女がこの人頭大丈夫か？　みたいな目をする。当然だろう。

「俺の事情は後で話す。ご主人様が嫌なら勇者様とでも呼べ。あのエルフも俺のことは勇者って呼んでいたしな」

「どっちでも変わらなくないですか？」

俺は諦めた。いいじゃん。奴隷にご主人様って言わせて何が悪い。「ほらよ」

だが、これ以上の説得は無意味だと俺は思い、とりあえず銀貨を2枚渡した。

「銀貨二枚あれば二人分でそれなりのいいもんが買えるだろ。お前が150ギルくらい使っていいぞ。俺の分は50ギル位で、全身分三日分くらい頼むわ」

名前のことは諦めたのか、目の前の少女は満面の笑顔で、

「はい、わかりましたっ」

そう言って、服屋に入っていった。そして俺は、

「服屋って苦手なんだよな」

ひとりつぶやいた。

数十分。いや、一時間弱が経った。手持ち無沙汰になって待ち続けていた俺も、そろそろ待ちきれなくなった頃だった。

「どうですか？　ご主人様」

美少女が服屋から出てきた。全体的にピンクでまとめられた服は、可憐なお嬢様を彷彿した。

「可愛いな」

俺は正直に答えた。

「うーん。女の子を褒めるならもう少し答え方があってと思いますよ」

？」

ダメ出しされた。

「可憐なお嬢様みたいだ」

正直に答えたパート2。

「ありがとうございます」

お気に召したのか顔が綻んだ。

「俺のは？」

簡潔に俺は聞いた。いや、複雑に聞くのも難しいけどね。

「これです」

そう言つと、目の前の美少女は俺に持っている服を投げてきた。

やまなりの軌道を描いた服は、俺の手元に入る。それを俺は見て、

「結構いいな」

一人呟いた。それが目の前の美少女にも伝わったのか、

「ありがとうございます」

感謝された。

「いや、お世辞じゃないんだから、お礼を言うのは俺の方だ。ありがとな」

そう俺は付けたした。

「いえいえ」

照れくさそうに目の前の美少女は言う。

「では、話せるところに行きましょうか」

そう美少女が言つと、俺たちは歩きだした。

十二話、名前や過去

俺らは服屋から出て、ずっと歩いていた。目の前の美少女が機嫌よく俺を先導する。

目の前に建物が現れた。俺はそれを見て、洒落ていると思った。「ここです！」

目の前の美少女の機嫌が一層良くなる。「なにが？」

いきなりここですって言われても困る。俺は聞き返した。すると美少女はむっとした目になり、

「食べ物屋ですよ。雰囲気的にわかりませんか？」

異世界人だからわかりません。と答えようと思ったが、そんなこといきなり言われて信じるか？ と聞かれたら俺だつて信じまい。とりあえずやめておいた。

「ソウダネーココハスゴクタベモノヤツポイナー」
棒読みで答えた。

「そうですよ。じゃあ、入ります？」

まあ、入るだろう。ほかならぬ美少女@俺の奴隷の薦めだ。入らないわけにもいくまい。俺たちは、食べ物屋に入った。

さて、食べ物屋。名前はミルド食堂と言らしい。に入った。

「じゃあ、とりあえず食べ物でも頼みますか」

俺は言った。

「そうですね。食べ物待っている間とかは、意外と話がはかどりそうですし……」

そういいながら、メニューをみる。普通に定食でいいな。鳥の丸焼き定食……丸焼きは苦手だ。焼き肉定食は似たものを昨日食ったしな……焼き魚定食はほかと比べてお値段がかなり高い。俺はそんな感じでうんうんと唸っていた。それを目の前の美少女がみると、

「早く決めてください。いくら何でも遅すぎます」

5分くらいかけて決めない？ まだ一分ちよつとだよ？

「もう少し悩ませてくれ……」

まあ、バカ正直に言うのもはばかれてる。適当に逃げの一手を打っておこう。

「そうですか……」

嫌々ながらも納得したようだ。

さすがにそれ以上待たせると、不機嫌まっしぐらになってしまうので、その後一分くらいで、干物定食にする事に決めた。

「遅いです……」

早い方なだけだな。まあ、このまま飯を決める話題で、会話のイニシアチブを向こうに握られることもあるまい。俺は話を転換することにした。

「それで、とりあえず……なにかからはなそうか……」

シリアスっぽく俺が話せばイニシアチブは握れるだろう！

「そういえば、ご主人様、私の名前って知ってましたっけ？」

「……………」

知らなくね？ おれそういえばこの目の前の美少女@俺の奴隷の名前を知らなくね！？

「……………ソラです」

「ソラか……いい名前だな」

本心からそう思った。ソラ……………いい名前じゃないか。

「まあ、本題に入ろう。俺は勇者だ」

「……………」

静寂。一瞬で極寒の北極に連れ去られたような静けさと冷たさ。

俺が言葉を発した瞬間、それが俺の周りを包んだ。

「頭……大丈夫ですか？」

いや、事実だし……

「なにを見せれば信じてもらえる？」

「王様からもらっているはずの勇者の証>イロアスペリオリスモスくですね。歴代の勇者を載せている歴史書や、勇者の自伝には、確実に勇者の証について記されていました。ご主人様が勇者なら、それを持つているはずですよ」

言葉に詰まった。もらってないや、そんなもん。貰う前に殺しちゃったし。どうしようか。困った。

「……………本当に勇者なんですか？」

正直に言おうか、俺は迷った。まあ、いつかは知らせないといけないことだ。今言っても何ら問題はあるまい。

「俺が王様を殺した」

「……………」

静寂第二号。いや、本当だよ。さらなる冷たさが俺を包んで蝕もうとしてくるけど、俺は潔白だ！ 王様殺して、罪になりますね。潔白じゃないですね。すいません。

「本当だ。勇者の証を貰う前に王様を殺したから、俺は勇者であるが、勇者の証を持っていない」

「……………本当？」

「本当だ」

おれって正直ものだな。ここまで正直に全てを明かせるなんて。なんていい人なんだ。王様殺しだけど。

「まあ、仮に、仮にですよ？ ご主人様が王様を殺したと仮定しましょう。本当に仮にです。何でそんなことを？」

まあ、当然の疑問だな。誰だっ考える。

「世界を……………壊したいんだ」

「は！？」

「俺は、俺を勇者として召還したこの世界が憎い。俺を魔王討伐の

手先としか見ていないこの世界が憎い。元の世界での幸せを奪ったこの世界が憎い。だから壊す。あーゆーおっけい？」

「……………」

ソラは絶句していた。

「おい、大丈夫か？」

「本当に……………頭大丈夫ですか？」

「ああ、なにも問題はない。一週間くらい旅の準備を整えたら、この街も壊すつもりだ」

「この聖職者の街、イエレアスを壊すんですか？」

この街、イエレアスって言うんだ。初めて知ったな。

「勿論だ。そのためにはどんな障害もはねねのけてみせる。魔法使いだろうが、騎士だろうが、軍隊だろうが、国そのものだろうが、魔王だろうが、何だって俺の敵だ。この世界の全てのものを俺は敵として受け入れる」

「私は？」

すんなりと、空いた心に入ってくるように、ソラは言った。

「敵さ、だがよ、旅は道連れ世は情けって言うだろ？一緒に旅をする人が一人は欲しいんだ。俺がおまえ以外の全てを壊すまでは、俺はおまえを壊さずに、味方となる」

「そうですか……………」

沈痛な雰囲気広がる。先に口を開き、言葉を発したのはソラだった。

「私、彼氏がいたんですよ」

なぜそんな話につながるのか俺は疑問を一瞬持った。

「奴隷に売られる…………一週間前くらいですかね。彼氏に結婚しようって言われたんですよ。私はこれでも、村長の娘だったんで、勝手な結婚をする事はできなかったんです」

俺はなぜだかわからないが、うなずいた。いや、頷かなければいけないと思った。生き方を、肯定しなければ……………

「駆け落ちをしよう……………そう彼との間に約束をしたんですけどね、

何処から情報が漏れたのか、もしくは、ただの運命のいたずらだったのかはわかりません……ですけどね、」

次にでてくる言葉が、怖くなった。なぜだろうか……

「駆け落ちの前日……村の財政を救うとかで、奴隷に売られちゃったんですよ……」

唇を噛みしめるように、彼女は言った。一筋の涙が、俺の頬を通り過ぎた。ソラの目にも、水が……溜まっている。

「なんでっ、ご主人様が泣くんですかっ……？」

「俺は……おまえと同じ……いや、すごく似ているんだよ……」

一瞬困惑した顔になるソラを無視し、俺は続きの言葉を紡ぐ。

「話すよ、召還前夜を……」

十三話、過去や現在

過去。

「俺はおまえが好きだっ！！！！！！」

精一杯の告白。目の前にいる彼女はとう受け止めるのか、俺はそれでかなり悩んだ。いままで、告白するかしないかでかなりの悶々とした日々を過ごしていた。数秒。俺が感じるにはあまりにも長い時間だが、現実として現れるのはたかだか数秒という時間だけだった。

「はい……」

俺は一瞬頭の中が真っ白になった。が、すぐさまそれを肯定として受け取るのを頭の中が拒否し、疑問なのかと勘ぐるようになった。どれだけ矮小な男なのだろうか、俺は。ただ何もすることもなく、無言の時は数秒として現れ……

「こちらからも言わせてください。付き合いましょう。君」

今度は先ほどよりもながく、俺は思考の狭間に取り込まれていたと思う。何がこれほど頭の中を働かせるのか。俺にはわかった。ただ単に、うれしいのだ。先ほどの矮小な自分も、うれしかったの裏返しなのだろうとようやく気づく。うれしさと幸福が俺の頭の中を支配した。

「ありがとう……」

俺は一筋の水を頬に伝わらせながら言った。

「泣くことはないじゃないですか」

彼女は笑いながら言う。俺の心はそれだけで満たされた。こうして俺と朱里は、彼氏彼女の関係となった……

次の日はもう会えぬ関係になったんだ。すべての過去を彼女の元に置き去りにして。

現在。異世界。

「こんな幸福の直ぐ後に転成だ。神様のお召しだとしても、これほど酷いことはないだろう」

俺は言った。俺は天意的に、彼女は人為的に、最愛の人との別れを余儀なくされたのだった。悲しさ。無気力感。それが俺を包んだ。目の前のソラにもそれが伝わったのだろう。絶望の目は、黒き輝きを持っていた。

「天意によって転移……プッ」

おい、俺は今こいつを殺していいよな？ 黒き目に絶望は俺をおちよくる前触れかよ。唐突なソラの発言に、俺の怒りは頂点に達しそうだった。

「ああ……すいません。つい」

「ついじゃねえよ!」

俺は思わず突っ込んでいた。どんだけ人間味がないのだろうか。

確かに過去の栄光にだけ浸っていた俺も悪いと思うよ。悪いけどさ

……

「まあ、それでこの異世界を壊したいと……わかりました」

俺の崇高なる目的がわかったのだ、俺はそう考えた。

「私も、それに荷担しましょう」

「は!？」

飲食店内に、俺の声が響いた。

「おまえ……戦闘できるのか？」

「あつ……」

あつじゃねえよ、どうやって世界を壊すんだよ。

「まあ、世界を壊す人のサポートくらいならできますよ」

「まあ、それもそうか」

事実、俺は一人旅が悲しいからという理由でソラを買ったわけだしな。旅のサポートをしてもらうのは当然だと考えた。そして……

「《真贋判定くアリスイアブセマく》」

そうは考えたが、俺は彼女に全幅の信頼を置いているわけではなかった。そして、本当にこの少女には、先ほどのような過去があるのか？ と疑問に思った。

「え？」

ソラは訳が分からないような顔をする。

「真です」

本当……か。人の心を見透かしているみたいで嫌になるな。殺す相手じゃなく、今から旅する相手というのが、何とも気が引ける要因になっている。本当……か。

「ちよっと、おまえの言葉が本当かを試したんだよ」

「そうですか、まあ、疑われるのは当然ですしね、それくらい許しますよ」

「一応、立場が上なのは俺だぞ？」

「そうですねー」

気だるそうに彼女は言う。

「はあ……」

俺はため息をついた。本当にこんな奴と一緒にこの先が大丈夫なのかが不安になったからだ。

「まあ、おまえがはじめからバカ正直に、自分の過去をはなしてくれたのは感謝しているよ、ありがとう」

俺の感謝の言葉に彼女は、

「どういたしまして」

と、照れくさそうに答えるのだった。

十四話、予定とか水

結局俺たちは、今後の予定は適当に決めて、話が終わった。まあいいじゃないか。目の前のこいつが信頼できる奴だとわかった時点で、俺はもう満足しているんだ。ぶっちゃけ、旅の知識とか0だしな。無駄に俺が口出ししても意味はない。

「それで……おまえ、旅するのに必要なものとかわかるか？」

「旅は村からこの街まで、奴隷として連れてこられただけなので、わかりません」

わかんないのか。俺は落胆した。というか、それどころの話ではない。旅の心得を持つている人がいないとなると、俺たちはどうやって旅をしたらいんだ？俺には到底わかりそうもなかった。

「まあ、取り合えず馬と食料と水があればいいんじゃないですか？馬は必須じゃないですけど、できればほしいですよね」

馬……か。買えるだけの金は作れる。だって、見たことも触ったこともあるから、物質創造>イリコジイミウルギア<を使えば簡単だ。だが……

「おまえ、馬の乗り方とかわかるか？」

「わかるわけないじゃないですか」

俺たちの旅は前途多難らしい。

冷静に考えれば、俺の意に沿う生物を作ればいいんじゃないか、と思った。勇者だからそれくらいできるだろう、と思った。だが、俺にもできないことはあるらしい。そのことを考えても、頭の中に文字は踊らなかった。

「どうすつかな……」

俺はまじめに考えた。今はソラと商店街を歩いている。王殺しの重罪人でも、顔を見られなければ大丈夫だということが、身を持つてわかった。誰からも見られない。服装はこの世界っぽいものに変

えたしな。

「どうすればいいと思う？ 俺の魔法でも、意に沿う動物を作るのは無理らしい」

「勇者様でも、そこまでは無理でしょう……」

ソラは呆れたようだった。どうすればいいのかな、と俺が考えていると、隣にいたソラが、水を得た魚のような顔……ソラの顔は魚っぽくないから例えとして不適切だな。のどに刺さった骨がようやく取れたような、すがすがしい顔をして、興奮しながら俺に話しかけてきた。

「ご主人様！ 意に沿う馬を作るんじゃないくて、馬を意に沿わせる魔法を使えばいいんじゃないですか！？」

成程。俺は素直にそう思った。確かに一理ある。そう思ってそのことを頭の中で思案すると、文字が頭の中で踊った。これで、旅の問題点はたぶんクリアだろう。馬に言うこと聞かせることができれば、快適な旅ができるに違いない。きっと夜もぐっすり寝れ……

……

「おまえ、野宿の準備とかできるか？」

「無理ですね」

やっぱり、俺たちの旅は前途多難なようだった。というか、水の問題もクリアしてないな。水とか簡単に出不せないかな、とっていると、文字が踊った。

「《清き水>カサロネロ<》」

俺がそう唱えた瞬間、水が降ってきた。幸い、俺の頭の上に降ってくるようなイベントはなかった。前に降った。うん。そこまではいいんだ。只………勢いが強すぎて、俺とソラに水がかかったんだ……

ムスっとした顔で、俺を睨みつけてくる少女。服は水で濡れていて、清楚なお嬢様のような服が濡れていて………扇情的だ。果てしなくエロい。可愛い顔と、扇情的な服が、相反する効果……ギヤップをだして、とにかくエロい。そんな少女が、俺をにらみつ

けていた。

「はは………はははは………」

それに対して、俺は乾いた笑みを浮かべることしかできなかった。いや、それはそうだろう。エロいな！ と、公衆の面前で言えるわけもない。

「何か………言い残すことはありますか？」

ソラが脅すように聞いてくる。俺はすぐさま、

「（濡れた服を乾かしたり、濡れた体を暖める、風呂にはいるため）ホテルに行きましょう！！！！」

なぜだろうか、完全に怒りを有頂天にしたソラは、俺を殴ってきた。理不尽だ。旅の問題を解決したのに、理不尽だ。

十五話、ホットドック風の食べ物とか

歩きながら横のソラを見ると、ムスツとした表情は崩していなかった。

「いつまでキレてるんだよ……」

一回宿屋に入って、服を着替えた（ソラは俺たちの服を服屋で何枚か買っていた）。

夕食付きの宿屋だったのだが、まだ夕食まで時間はあった。なので、一緒に外で適当にぶらぶらしようということになった。結構時間は経っていると思うのだが、ソラは不機嫌なままだ。

「キレてなんかいいですよ。場所や状況をなにも考えずに、勇者という特権で魔法を使うという、行為に異議を呈したいだけです」

それを世間ではキレているっていうと思う。うん。おつ、前に…

…屋台的なものが見えたな。

「あれでも食うか？」

旨いかはわかんないが、屋台的なところなんだ。独特な味を放っているだろう。

「いいんですか？」

ソラは聞いてきた。

「ぜんぜんいーぜ。旅の仲間なんだから親睦を深めたいしな」

不機嫌もおしたいしな、と続けたかったが、我慢した。

「ありがとうございます」

ソラはお礼を俺に言ってきた。別に旅の仲間になる仲間だから、そこまでかしこまらなくてもいいのにな。

「何で敬語なんだ？」

耐えきれずに俺は聞いた。

「慣れてますから」

間髪入れずにソラは答えた。よく聞かれるといった風だ。たぶん昔からずっと敬語なんだろう。

「そうか」

それ以上敬語について聞くことはなかった。あんま意味ないしな。

「旨いな、これ」

屋台でてきたのは、元の世界でいうホットドックのようなものだった。ただ、味は少し淡泊な感じはした。

「そうですね……」

こちらに笑いかけ、うれしそうに彼女は答えた。まだ金はあるし、さっきの宿屋で、ちよつと複製しといた。まあ、こんな時くらい見栄を張って、ソラに奢ったっていいだろう。怒りをなだめるためでもあるけどね。

横を見ると、ソラはもうホットドック風の食べ物を食べ終わってた。俺よりも早いんだな、と思いながら、俺は口に付けていたホットドックを離し、

「もう一個食うか？」

一瞬だけ彼女は悩んだようだった。だが、すぐに顔を煌めかせ、「はい！」

と答えてた。よく食べるな、と思いながら、俺はホットドック分の金を渡した。銅貨四十枚……多くな？ 銅貨と銀貨の間の金が多いと思つた俺だった。十円玉で、四百円のものを買う人はいまい、そう思つた。そして、俺が銅貨をソラに渡した。瞬間、ソラは怪訝な目になって、

「なんで、銅貨なんですか？ 大銅貨を使えばいいのに……」

そんなものがあるのか、一瞬そう思つたが、なら、銀貨を渡せば大銅貨が返ってくるよな、と思い、銅貨をソラから受け取って、銀貨を渡した。

少し後、ソラはホットドック風の食べ物を二つ買つてた。

ホットドックを食べているソラを見て思つた。俺は何故こんなところでノンビリしているのだろうか、世界を壊さなくてはいけな

いんじゃないのかと。

なぜ、俺は誘拐犯の家でくつろいでる？

俺は即刻この世界を壊したい。生きる糧を得たら、すぐにでも壊したい。だが、壊すための行動に、ホットドック風の食べ物を食べることは含まれているのだろうか、俺は疑問だった。

「どうしましたか？」

ソラが俺に聞いてきた。聞くほど考え込んだ表情をしていたらしい。

「なんでもない、それで、大きめなバッグとか売っている場所はどこだ？」

探そう。生きる糧を。出来るだけ、早く探そう。壊したい。世界を。早く壊そうよ、世界を。

十六話、一週間の準備（前書き）

PV15000、ユニーク3000越えありがとうございます。これみなさんの応援のおかげです！

本当はPV一万の時にやりたかったんですが、すっかり忘れていました。

十六話、一週間の準備

世界を壊すと再認識してから、約五日。俺は躍起になって旅をするために必要なことと、この世界の状況などを調べあげた。犯罪者になりながら世界を巡るんだ。石橋を叩いておいた方がいいだろう。毎日、夜には酒場に入り浸った。初めて飲んだ酒だが、魔法で強制的に酔わないようにした。情報を得るために酔っているようでは話にならない。結論として、ミルド帝国は、騎士派と神殿派が存在していた。

「そんなこと常識ではないんですか？」

酒場から帰ってきた後、情報の整理をしていたら、何故か起きてきたソラに言われた。

「俺は別の世界から来た人間だから、この世界の情勢とかには全くと言っていいほど疎いんだよ」

ああ、と、ソラは納得したような顔をして、

「じゃ、寝ますね」

そそくさとベッドに入っていた。少しは手伝おうとかないのかね。まあいいや、俺は情報を纏めた。

帝国には、騎士派と神殿派が存在。

国王は神殿派

他の国とは、戦争をしているが膠着状態にあり、兵士も配備されてはいるが、すぐにでも戦おうという雰囲気ではない。ただし、国王が死んだので、それをみて向こうが攻めてくるかは不明。

魔物は、ここら一帯は比較的強い。他の国と比べて断然に強い。理由は、近くに魔王城があるかららしい。魔物に悩まされているから、俺を召還したのだと納得がいった。

この国では、国の兵士よりは、冒険者や傭兵の方が基本的に強い。ただし、冒険者や傭兵よりは、騎士の方が強い。

魔法を使える奴は意外と少ない。

旅の情報 e t c ……

結構な情報が集まった。まあ、ここで使いそうな情報はこの国の状況だろう。神殿派のトップ相当である、国王が死んだので、騎士派が仕掛けてくる可能性は大いにあるし、他の国、名前はビルド連合や、ライル帝国だったか、ふあ、攻めてくる可能性も捨てきれない。さらに、魔王軍の攻撃が熾烈になることもある。

「この国ってかなり不安定だな……」

俺は、一人でそうつぶやいた。危険な爆弾をいくつももっている。しかも、それに対抗するのは、金で動く冒険者や傭兵たち。騎士は数が少ないらしい。

「それで勇者を呼んだのか」

確かに勇者を屈服させる手だてがあれば、まず、魔物への脅威は減る。しかも、その勇者がこの国を好いてくれ、騎士などに入ったら一騎当千の活躍をするだろう。

「ま、俺はこの国を壊すがな」

反撃される余地を勇者に残すなんて、甘いよな。と、俺は考える。速攻で拘束し、魔法に対する手だてをなくし、奴隷にすれば、完璧だろう。

「思考を呼んでいるようで悪いですけど、親族の合意がないと、奴隷にはできませんよ。奴隷承認は、親族の前で、奴隷準備という魔法を使うしかありません。結論から言うと、勇者は奴隷にできません。また、勇者が国に逆らわない理由は王家の最大級機密となっていますが、今までの勇者系の文献を紐解いていくと、序盤は洪々つきあっていた風が多いそうですよ」

なんという、知識量。詳しすぎる。

「何でおまえはそんなに詳しいんだ？」

「一時期首都で、勇者専攻の勉学を修めていたんですよ。村の金銭的危機で、戻らされましたけどね」

「そつか……」

ソラも昔から苦勞しているということは感じていた。だが、まざまざと、元の世界の人々と、この世界の人々とは、格差がありすぎる。こんな文明が低い世界で、高度な趣味と呼べるものもなく、ただいきる最低限度の稼ぎを得る生活など、俺には想像ができなかった。

「この世界は…… 大変なんだな」

「この世界が大変なんじゃなくて、ご主人様の世界が楽すぎるんですよ。働かなくても生きていけるとか、どんなパラダイスですか。この世界では、六歳くらいでふつうに働いて、労働力にならなかつたら即奴隷ですからね」

「そうだな……」

こうして考えてみると、イージーモードの人生から、いきなりハードモードに難易度をあげられた気分だ。勇者補正だけでどこまでできるのか、俺にはわからない。力を理解していない。

「ご主人様は、勇者補正がある分楽じゃないですか」

「危うく魔王討伐の手先になるところだったがな。上の命令で動きたくねーよ」

「上の命令は絶対ですよ？ ご主人様の世界のような平等を目指している人なんてどこにもいません。ただ、生きるには自分が働くか、他人に働かせるしかないんですよ。他人を働かせるのも楽じゃありません」

「まあ、そんなことグチグチ言い合っても仕方ないだろう。それと、そろそろ旅の支度が整ってきたから、明後日あたりにでも、壊すぞ」

「あい、わかりましたよ。私はどうします？」

「できれば壊すのに加担してもらいたいな。身体強化の魔法は使えるから、戦えると思うし」

「できれば殺したくありませんね。今までに人を殺したことはありませんし、抵抗はあります。まあ、この世界でこんな潔癖なことを言っただけとは思いませんけどね。まあ、それでも私が戦う必要があったときは、ご主人様が命令でもすればいいと思いますよ？

そうすれば私は少し楽ですしね。できればやってほしくないですけれど」

「わかったよ。できるだけソラは殺しに加担させない」

「ありがとうございます。こんなことも言っていられないのはわかるんですけどね」

「まあ、仕方ないだろ。人間を殺すのに抵抗がない奴なんて、俺がみてみたいくらいだ。俺だって復讐という確固たる目的の上じゃないと殺したくはないしな」

「人を殺す理由なんて、いりませんけどね」
そうした雑談で、夜は更けていった。

十七話、朝方の喧騒

喧騒。いくなれば、阿鼻叫喚の図。俺は悲鳴を聞いた。なんだろう、俺は寝ている体を起こし、意識を覚醒しようと試みた。が、昨日遅くまで起きていたのが響いていたのか、なかなか起きれない。

「くそつ、《朝の覚醒>プロイアフィプニスイ<》」

魔法に頼り、俺は起きあがる。すべてを魔法に頼るような人間にはなりたくないのだが、何か騒がしいのに、二度寝をしようとも思わない。

起きた頭に、走る音、怒声、悲鳴。様々な音が鳴り響く。外の窓ガラスに目を向けると、土埃が立っていた。

「何だ？」

俺は疑問の声を上げた。横にいるソラはまだ眠っていた。

「起きろ、ソラ」

「うう。う」

意識が完全に寝ている。軽くいっただけじゃ起きなさそうだ。

「ちっ、【起きろ、ソラ】」

ビクッ、ソラの体が跳ねた。

「ど、どうしましたかっ!? なにがあったんですか!?!」

驚いたように大声を上げる。よくわからないが、驚いているようだ。

「いや、いきなり頭の中から声が響いて、強制的に意識を起こされたんですよ」

奴隷魔法効果で起きろといったら起きるということを俺は学んだ。便利だな、奴隷魔法。

「というか、それで何で私を起こしたんですか？」

「ああ、外で喧騒が……」

ぎゃあああ!!!!!!

さらに強い悲鳴が響いた。

「どうした!？」

「なにがあつたんですか!？」

俺たち二人は部屋の外に飛び出した。

目の前で馬に乗った騎士が駆ける。槍を手に持ち、武器を持っている人間を片っ端から襲っている。

「なにが……起こっている……?」

俺は思わずつぶやいた。なぜ、騎士が武装している人を襲っているのか、俺は考えた。

「なんで、こんなことに……」

隣にいるソラも絶句している。俺だってなぜこんなことになっているかなどわからない。騎士派がこの街を攻める理由は何なんだ?

「おい、そのあんた! さっさと逃げろ! 殺されるぞ!」

道にいる青年が俺に向かって叫んでくる。人間が殺されているようだ。

「とりあえず……荷物持ってくるか」

一週間で買った旅のための荷物を置いていくのは避けたい。物質創造するにも、かなりの数があるので、疲労が来るはずだ。

「え、ご主人様!？」

宿屋のドアを開け、いきなり走って入った俺に、ソラが驚く。大丈夫だ、すぐ持ってくる。そう俺は思いながら、荷物を取りに行った。

幸い荷物は纏めておいたので、すぐに持ち出すことができた。そのとき、念のために武器屋で買っておいた、高級品の剣を持ち出す。なにやら、希代の名工が作った剣だとか、二万ギルという、ソラと同じ値段だったが、何か武器がほしかったので、とりあえず買っておいた。

荷物を持ち、魔法の鞆にそれを入れる。魔法の鞆は自作だが、簡単にいうと四次元ポケットだ。何でも入る。因みに鮮度も落ちない。旅先で鮮度がいいものが食べれるのは重要だ。

階段を駆け降りた。ソラがいた。

「どうしますか、ご主人様！？」

叫ばれた。

「とりあえず荷物はだいたい持つてきた。一時的に透明化して、様子を見る。その後、膠着状態になるか、この争いっぽいのが終わったところで、この街を壊す。そして、次の街へ。これでいいか？」

「たぶん大丈夫です」

ソラにもこの作戦でいけるのかどうか自信がないのだろう。正直俺にもない。だが、時間もないので、とりあえず透明になっておいで、状況を見たいのだ。

「じゃあ、やるぞ、《透明化>ズイアフアニスアンスロボス<》」

俺とソラが存在をほかの人間には感知できないようにした。これで、襲われる心配はなくなるだろう。流れ弾には注意しないとだが。「とりあえず、どこに行く？ この状況をわかりそうな場所……」

「この街の分城だと思いますよ。神殿は、今はもうないですし、それを考えると、政治的観点で物事がわかる場所は城です。情報だけなら街を歩いている傭兵や冒険者に聞けばいいんですが、傭兵や冒険者がこんな状態で悠長に受け答えをするかという、疑問ですね」「城に行つて、盗み聞きでもするか……」

そう俺が言うと、ソラは、

「城はこつちですよー ご主人様が情報周している間、私だってなにもしていない訳じゃありませんからね」

おお、結構いろいろと調べてるんだな、と、俺は思ったが、

「街のおいしい食べ物屋を探すため、この街の隅から隅まで調べあげましたからね」

前言撤回。俺が与えた金を使い潰しているだけだった。

「まあ、城の位置を知っているのは有り難い。案内してくれ」

「わかりましたよーちゃんと働き分の小遣いくださいね。私は食べ物のためなら、何でもできますよ」

「あいあい、わかったよ」

こうして俺たちは、ソラの先導の元で歩きだした。多分こんな悠長な雑談をしている暇はなかったんだろう。

十八話、戦闘其の壱

町中では戦闘が繰り広げられていた。騎士が刺し、兵士がいなす。その後ろで神殿の魔法使いが魔法を放つ。傭兵は両サイドにいる。完全な騎士派VS神殿派の構図が出来上がっていた。俺はどちらにも加担することなく、透明化して街を駆けていた。

悲鳴を上げる人々。魔法の流れ弾に当たって泣きわめく人々。なにも感じない。せいぜいざまあみろと思うくらいだ。俺が殺せなくて残念なくらいでもある。復讐の代行者などいない。俺は自分の手で復讐をする。または、自分と同じ境遇の者で、だ。

「どうしますか？」

前を見ると城があった。すでに城に着いていた。

「とりあえず内部潜入だが……」

地味にやつかいだ。と続けるのはやめた。だが、やつかいなのは事実だ。まず、透明化してもドアが開くのは気づかれる。自然な物の効果をごまかすのが一番難しいのだ。

「仕方ないから、飛行でもするか……」

まあ、城は少し固めの守り、簡単には入れず、城門は閉じられていた。まあ、飛べば関係ない。便利だ。

「さて、飛ぶか。《飛翔>ペタオ<》」

呪文を詠唱して、空に飛び上がり、城の中に入ろうとしたそのときだった。

「ネズミとは感心しませんねえ」

！？

俺は驚愕した。その声を発した方向をみると、確かに俺の方を向いていた。

「今は、確実に我ら神殿派が権力をつけるときなのに、それを、騎士ごときに邪魔されたくはありませんね。隠れた騎士さん？」

ばれている。俺は思った。なぜだ？俺はわからなかった。透明

化はなかなか人に気づかれないはずだ……

「空気の流れですよ。まあ、今から死ぬあなたには、関係ありませんけどね、」

さらに驚愕。詠唱を始めた。これはまずい。透明化しているこちらを確実に見つけられる強さ。これまでの敵とは明らかに違った。

「《虹の光>ウラニオ・トクソスキア<》」

曲線状の光。数は……

七!?

一つ目、下から、俺は落ちていて、後ろによける。二つ目、右斜め下、左前に。

「っ!？」

声にならない悲鳴。俺の右から。ソラが少し腕を切った。致命傷にならなかつたのは、向こうが正確なねらいをつけられなかつたからだろう。透明化は解除されなかつたが、落ちた血は、確実に俺らの場所を伝える。

まずい！ 瞬間的に俺はそう思う。場所が曖昧というアドバンテージが、半分奪われた。が、俺が思考している間も、確実に光の曲線は襲いかかる。透明化を声に念じる暇もなく、俺は相手にも聞こえる声で、呪文を詠唱する。

「《炎の球>フロガスフェラ<》!!!!」

普段は中にも入っている炎を抜き、空洞状にして、発動する。予想以上に大きな炎の球体が、俺とソラを包み込む。

「なかなかやりますねえ」

炎の球がいとも簡単に四つの光の曲線を相殺してから、敵は言う。

「まあ、負ける気はありませんけどね」

悠長にしている暇はない。次はこちらから攻勢に出る。

「《緋色火花>アリコシャラーラ<》!!!」

相手の現在位置に、火花を発動……

「ここまで簡単にわかる攻撃も珍しいですね。魔力の流れで補足が一発ですよ。案外素人ですか？」

そういいながら、敵の姿が眩む。瞬間、敵の位置を発動位置にしていた俺の呪文は、あらぬ方向に発動される。

「私の位置をずらし、その上で魔法権の強奪。こんなの対策くらい初歩中の初歩でしょう？」

そういいながら、敵は、俺に向かってくる。俺は魔法を防がれた驚きから、反応が遅れていた。

「遅いですね、《虹の武器>ウラニオ・トクソプロ<》」

敵が持っている杖が虹色の輝きを帯びる。そのまま杖を振りかぶり……

やばい。あれに当たったら死ぬ。

勇者としての本能が語る。神速ともいえるような速度で、魔力を練り、

「《緋色の剣>アリコスパスイ<》」

俺の剣が緋色に輝く。まだ、終わっていない。負けてはいない。反撃を誓い、俺はソラを地面に落とした。大丈夫だ。飛行魔法で、しっかりと着地ができるようにはしておいた。

十九話、戦闘其の式

着地したか着地していないか。ソラがどうなったかをみる暇がないほど、激しい戦闘が続く。

緋色に光った俺の剣は、明確な決定打ともなれずに、敵の攻撃をなんとかいなしただけだった。

ガキンッ！！

緋色の剣と虹色の杖がぶつかり合う。が、剣は杖を押し切ることもできず、簡単に流される。

「魔力量、単純な腕力。どちらも達人レベルを超えた、未知の領域ですねえ」

敵が余裕そうにつぶやく。こちらは、急激な戦闘で、肉体的よりも精神的に疲れていた。そんな状態で、敵の言葉に言葉を返すような余裕はない。

「ですが、戦闘技術や、魔法の応用技術が足りないようでは、宝の持ち腐れですけど、ねっ！」

最後のかけ声と同時に、敵はこちらに杖を振るってきた。なんとか、精神や息を整え、緋色の剣で防御する。

振るわれた杖を、剣で受け止める。そのまま相手の方へ押し返すが、敵はこちらが攻勢に移ると同時に、杖から伝わる俺の力を受け流す。

「ちっ、《煉獄の炎>カサルティリオフロガ<》」

炎魔法を、俺が唱える。上空から降り注ぐ、紅蓮の炎。

「魔法の筋が単純すぎますね、まあ、こんな短い間で魔法を乗っ取られなくしたのは、すごい技術ですが」

そう敵が言い、こちらの攻撃をよけた。魔法ですら簡単によけられ、武器の攻防は簡単にいなされる。防御面へ特化している。こちらの勇者になっただけの付け焼刃の攻撃など簡単に防がれている。

こちらが思考している間にも、向こうは攻めてきた。

「せいっ！」

杖が、こちらの右下から迫る。緋色の剣で、防ぐ。八方塞がり。どちらからも攻め手がない。

「なかなか堅いですね……」

方法、方法はないものか。無効に痛烈な一打を食らわすことができれば、この戦闘には勝利できる。

「《速き光>タヒディタメガロスフオス<》」

向こうが詠唱をする。瞬間。悪寒が体の後ろを駆けずり上がる。圧倒的な、速さ。それに向こうの呪文は持っていた。こちらを驚くべき速さで来る魔法を感じできたのは、勇者補正という他になかった。付け焼刃の勇者補正でも、敵の攻撃は感じられる。ここまでの思考を一瞬でして、俺は魔法を放つ。

「《多き炎の盾>ポラフロガスピダ<》っ！！！！」

瞬間的に、周囲全方位に炎の盾を数多く出す。偶然か、多くを出したのが功を奏したのかはわからない。が、光の魔法が自身のところに届くことはなかった。速き光の魔法。速い。魔法。

何かを思いつく気がした。わからない。速いのと魔法と、もう一つの何か……

黒き物体。人を殺す小型の物体。

銃

理解した。倒せる。相手は倒せる。魔法と物理攻撃。何も向こうの土俵で勝負することはない。元の世界なら元の世界なりの戦術はある。

完全に空気に飲まれていた自分を反省しながら、俺は詠唱を開始する。

「《物質想像>イリコズイミウルギア<》」

銃弾。鉛の弾。金属を想像しながら作った小型の物体。それがこの世界に召喚されると同時に、俺は勝ち誇った顔をした。こちらの顔に何か危機感を抱いたのか、向こうも魔法を発動しようとする。が、

「《爆発>エクリクスイ<》」

単純なこちらの方が発動は速い。そして、威力を殺し、推進力を上げた点の爆発を、召喚した鉛玉にぶつける。

相手が驚愕の顔をする。魔法で乗っ取ることができない、ただの鉛玉。杖を使って防ごうとする、が、それではダメだ。

おれ自身も鉛玉と一緒に最大速度で前進する。魔法を唱えることだと忘れて、敵はただただ驚愕を顔にする。

鉛玉の攻撃と、俺の剣撃。どちらも喰らえば致命傷になる。それを悟ったのか、相手は一瞬諦めたような顔をする。そして、

俺の剣が、敵の首を砕いた。

「ふう……」

やっぱり、世界は広い。勇者補正があっても倒しづらい敵は今後も出てくるだろうな、と思った。まあ、強くて広い方が倒しがいいがあるがな。

二十話、城内戦闘

「おい、ソラ、大丈夫か？」

俺は倒したまんま城に入るか悩んだが、ソラの身を案じて、いったん城外に戻った。

「いねーなあ……」

まあ、勇者補正の魔法で探すけどね。本当に便利だな、と思いつながら、使いたい魔法を頭の中に思い浮かべる。文字が踊る。

「《人間探索>アンスロポスアナズイティシ<》」

頭の中に簡単な地図と赤い点が浮かぶ。結構近いな。そう思いながら、俺は走った。

「おい、ご主人様じゃないですか」

俺を見つけて早々、ソラは言った。

「何処行つてたんだよ」

「いやあ、暇だったもんで情報探索に。どうせご主人様なら、私の場所くらいすぐ見つけられると思いますし」

「否定はできないな」

勇者補正とは本当に便利だ。異世界にワープするときに未知の力でも働いているのだろうか。

「ちなみにこちらの研究者には、勇者が強い理由は説明できませんよ」

俺の思考を見透かしたように、ソラは言った。

「顔にでてますしね」

そんなに俺は分かりやすいのか。少し落ち込んだ。

「まあ、落ち込んでいないで城に行きましょうか。少し戦闘は収まっているようですし、流れ弾の心配はないでしょう」

「そうだな。《透明化>ズィアファニスアンスロポス<》」

唱えた瞬間、俺とソラは周りから感知されなくなる。

「一気に行くぞ！ 《飛翔>ペタオ<》」

まあ、飛んだところで体感速度はそこまで変わらない。だが、飛んだ方が気分が乗る。気分は大事だ。

「おおおおおおお！」

俺は意味もなく叫びながら、飛んだ。叫んだ方が速い気がするからだ。まあ、叫んでもたぶん周りには聞こえていないだろう。透明化しているしな。

「叫んでないで、さっさと行きますよ」

ソラに言われた。羽を持ったら叫んでみたいと思うんだけどな。

城に入ると、偉そうにしている太った貴族のような人間が居た。

無駄に意匠が凝っている服を着ている。名前はわからん。というか名前なんて意味がない。

「状況はどうだ！？」

焦った様子で、貴族の前に来た兵士に言った。この様子を見ると、神殿派が不利なんだろう。

「はっ、王様。戦況は幾分かこちらが不利ですが、傭兵の長らしき者と話を付けました。さらに、神殿の魔法戦士や、魔法使いも動員できるので、騎士たちに勝つことは容易であると思われる」

えー、負けてるけど、戦力は沢山あるから逆転余裕だぜ、ってことか。なら、少しでも逆転の目は減らすか。というか、王族嫌いだし。この貴族っぽい人、王様らしいし。俺が殺した王様の息子かな？ 即位が早いな。

「《小さき炎>ミクロスフォティア<》」

同じ呪文で死んだ方が幸せだろう。俺が魔法を放った瞬間。王様と呼ばれた男は死んだ。声も上げずに。目には困惑の色が浮かんでいた。

「ざまあねえな」

俺はソラにしか聞こえないと思われる声でつぶやく。というか、

ここで透明化しても無駄だな。解除。解除は念じるだけでできるから楽だな。

「お、おまえ等誰だ！？ 何処から来た！？」

兵士が驚いたように言う。剣を抜きながら答える。

「上から」

剣を振るう。兵士も訓練はしつかりしているのか、よけた。

「意外に強いな。《緋色の剣>アリコスパスイ<》」

剣を強化する。威力が上がり、速度が上がり、熱くなる。金属の部分触るとやけどすると思われる。なぜ魔法でこうなるのかはわからないが、実践の魔法で重要なのは、過程より結果だろう。

「ま、魔法騎士っ！？」

驚いたように言う。割合どうでもいいや。勇者補正で強化された脚力で簡単に懐に入り、剣を振るう。

「え！？」

疑問の声を上げてもう遅い。こちらの兵士もなぜこんな速いのかと、困惑の目が浮かんでいる。バタツと音がして、兵士は床に倒れた。

「弱いな」

物足りないと考える。先ほどの杖使いは強かったな。と思い出す。まあ、強い奴とも戦いたくないな、と思った。どちらもいやなんて満足だな。と、自分で自分を自嘲する。

「終わりましたか？」

後ろの方にいたソラが俺に声をかける。

「ああ、終わったぜ」

まあ、この人たちは悲鳴を上げていないので、兵士が来ることはないだろう。王様が居ると言うことは、跡継ぎ問題か。いきなり死んだから神殿派の王子と騎士派の王子で対立して、内部戦争か。馬鹿らしい。

「心底馬鹿らしいから、ここにいる神殿派を殺して、ついでに騎士派も殺すぞ。もう、この町に用はない。壊さずにしても、どうせ戦

争のまった中だろう。生活が面倒になる。ついでに、戦争が終わっても最低数日はごたごたするだろうしな」

そう俺が言うと、

「はい、わかりました。さっさと行きましょう。わざわざ人殺しの現場を長くみたくはありません」

「おまえが殺すか？ 意外と楽しいかもしれないぞ」

「いえ、遠慮しておきます」

「まあ、命令する気はねーよ」

人殺しをしたくない奴にわざわざさせることもあるまい。

「まあ、とりあえず、この城から壊すか」

と、俺が言うと、

「そうですね」

と、ソラが同意した。

二十一話、破壊の渦中

城が崩れていく。ガラガラガラと、音を立て崩れていく。

「壮観だな」

思ったとおりのことを、俺は言葉として紡いだ。青い空には城から沸き上がるような砂埃が待っている。それが清々しい青空を壊す。「そうですね」

本当には納得していない様子でソラが呟く。まあ、自分の国が壊されたとして俺が喜ぶことができるか？と言われてもできないだろう。だが、壊す人間はいるのだ。俺のように。

「そうか」

分かったように俺はつぶやく。多分本当は分かっているのだろう。でも、フリは大事だ。世界で生きるには、偽りも必要なのだ。

「次はどうしますか？」

ソラが言ってくる。離れたいのだ。人の悲鳴から。今は止んだが、先程はトラウマになるような悲鳴が城から沸いていた。それが怨念としてうずくまっているような気がする。俺だってそうなのだ。まだ良心というものを多く持っているソラには耐えられないのだろう。「まあ、次のところを適当に探して壊すか。まあ、街全部を壊す気はあんまりないよ。気分が出たら壊すけどな。次は……騎士隊のところで襲うか」

何故街全部を壊さないのか？ 世界を壊すとして俺は世界の何を壊すのか？

何も決まっていなかった。何も決めていなかった。この壊すという段階でそれを思い知らされた。俺だってわかっていたさ。わかっていたとも。俺がただこの世界に飛ばされたという現実から逃げただけだって。

「もっと真面目に探すかなー」

元の世界に戻る方法を探しても、戻らない時間はあるのだ。この

一週間は確実に戻らない。万が一、もしかしたら、この世界に転移してきた時間で元の世界に戻るかもしれない。だが、それはあくまでもしかしたらの話なのだ。本当にその時間に戻る保証などどこにもない。というか、元の世界に戻る方法があるのかもわからないのだ。

「何をですか？」

ソラが聞いてくる。ああ、前後の話と脈絡が何もなかったな。過去を振り返る。

「いや、少し元の世界に戻る方法でも探そうかと思ったんだよ。そんなもんがあるかは知らないけどな」

俺が観念したように言う。いや、事実観念しているのだ。諦めているのだ。

「そうですね……私が知っている限りでは、元の世界に戻った勇者はいません。希望を壊すようで悪いですが」

「そうか」

居ないのか。居て欲しかったな。一人でも、この世界で幸せに過ごしたと語られるであろう勇者は本当に幸せだったのだろうか？

元の世界に戻ろうと思わなかったのだろうか？ わからない。過去など何もなく。すぐるべきものは全て元の世界。あるのは勇者補正の力とソラだけ。

「まあ、とりあえず騎士隊のところに行くか。憂さ晴らした。騎士には悪いが」

そういうと、先程より少しは明るい表情　　といってもまだ暗いままだが、で、ソラは頷いた。

不自然なほど舞っている砂埃。血と肉の臭い。悲鳴。三重奏に彩られた場所。そこはまさに戦場というにふさわしかった。

「なにが起こった……？」

俺は呟いた。騎士団の休憩地がこんな状態になっているとは、にわかには信じられない。

「なにがあつたんですかね？」

ソラも言う。

「わかんねー」

なぜこんなことが。わからない。砂埃の中を俺は進んだ。影が見える。周りには積み上げられた人影。よく見ると死体だった。

「勇者か？」

図太い声が響いた。真ん中の影。よく見ると人間ではない。異形の怪物。それもかなり巨大。しかしながらどこことなく理知的な雰囲気を持つ怪物だった。

「ああ、一応勇者だが、おまえこそ何だ？」

「ああ、朕は魔王だ」

なぜだろうか。勇者物はラストに魔王がでるものではないのか？

「まあ、魔王と勇者が会えば、やることは一つだろう？」

魔王がそう呟いた刹那、戦闘の火蓋が切って落とされた。

二十二話、魔王戦其の壱（前書き）

なんだか、ながいんだか短いんだかわからない一話に……

二十二話、魔王戦其の壱

魔王が神速とも言うべき速さで俺の懐に入り込む。

「ちっ！」

俺は舌打ちをしながら剣を抜く。同時に魔王も剣を抜き……

両者剣を振るい、剣と剣がぶつかった。金属音が付近一帯に響きわたり、近くの砂埃は周囲に弾け飛んだ。

「なかなかやるな」

魔王が俺に言う。

「ありがとよっ」

言い終わると同時に俺は魔法を唱え始める。

「《緋色の剣>アリコスパシ<》！！」

俺の剣が緋色に光り始める。詠唱の終わりにはもう少し……

「《悪魔の囁き>デアヴォロスプシスイロス<》！！」

魔王の声が響いた。同時に黒い何かが俺の魔法を止めようと妨害してくる。

「チッ！？」

俺は叫びながら魔法の発動に使っていた魔力を少し防御に回す。

それと同時に新たな魔力を練る。

先ほどの杖使いとは違い、真つ当な魔法での魔法妨害。それほどなら少し魔力を練れば防げる。

が、

「甘いいっ！！」

一度後ろに引いていた魔王が俺に再度接近する。抜いた剣を振りかぶる。俺はまだ剣の強化魔法が発動していない。

強化していない剣で魔王の剣を受け止める。先ほどより重いつ！？

「単純な魔法妨害でもすると思ったか？」

成る程、敵の魔力を自分の剣の強化に換算する魔法か。防御に回していた魔力が奪われている。その分が強化されていたのだらう。

だが、

「考えている暇なんてあるのかっ!？」

魔王の攻撃がさらに重くなる。こちらの剣で受け止めるのがいっぱいになってくる。

「よしっ!」

俺の剣が緋色に光る。強化は完了した。強くなった剣で少し押し返す。が、完全に押し返すことはできない。

「《黒い悲鳴>アスワドウルリャフト>》」

魔王が冷徹な声で詠唱をする。剣と剣の間から悲鳴が響く。俺の耳に響いてきた声は確実に俺の精神力を蝕み、妨害してくる。

「くそっ、何でこんな早く魔王がっ!？」

無意識下に声がでた。当然だろう。異世界に転移した場合、魔王はラストボスじゃないのか？

「敵の有能な芽は早くに摘む主義だからなっ!」

魔王が叫ぶ。当然だろう。わざわざ敵が自分を殺せる強さになるまでのんびりしている奴などいない。

「そうかよっ!」

そう俺が応えると同時に、俺は剣に込める力を強くする。だが、これでは八方塞がりだ。一瞬力を抜き、別の方向から、攻めるっ!が、力を抜いた瞬間。向こうが力を入れ、

「ふんっ!」

こちらを押ししてきた。突然の行動に吃驚し、俺は後ろに吹き飛ばされる。

「やはり戦闘経験はまだまだだな。勇者よ」

知るもんか。俺は再度飛びかかっていった。

自分でも不思議になるほどの声を上げながら前へ走る。そして右の方に剣を降ろし、左上へ、斬り上げる。

「まだまだだな」

魔王は斬り上げた剣をいとも簡単に剣で受け止める。剣が駄目か、なら、魔法で攻める。

「《炎の槍>フロガロンヒ>》！！！！」

魔王の四方八方から槍を出現させる。単純な魔法なので、妨害するほどの時間はない。

それに対して魔王は剣を周りに振るう。炎の槍はいとも簡単に空中に霧散。その力を剣は得る。こちらに魔王が向かってきた。

「ちいっ！」

俺は剣に魔力を込める。魔法という難解なものでもなく、ただ単純に強化する。魔法と違って複雑な相乗効果が生み出されないが、単純な力は少し変わる。

「無意味だな」

魔王が呟き、俺の剣も振るわれる。空中で魔王の剣と俺の剣がぶつかるが、いとも簡単に俺は押し負ける。後ろに倒れ込んだ。

「チェックメイトだ」

魔王が勝ち誇った笑みで言った。

二十三話、魔王戦其の貳

諦めるな。諦めては駄目だ。方法は確実にある。魔王がこちらに接近する。気にするな。魔王を倒す方法を考えるんだ。魔王だつて世界の一部だ。魔王を壊さずに世界を壊すことなどできない。魔王が剣を降りかぶる。くそつ、取りあえず視界をぼかそうと、魔法の詠唱を始める。

「《霞炎>オミフリフロガ<》!!!!」

ゆらゆらと揺れる灯火のような空間を剣と俺の間に作成。

何故か俺は炎系の魔法が得意だ。とつさに視界をぼかす魔法を發動したら、炎属性だった。さてよ、炎属性の霧が、空中に霧散している？

この作戦が成功すれば、きっと魔王も倒せる。そう思った俺は、魔法を發動させる。が、

「おおつとお!？」

危ない。わざわざ視界をぼかしたのに剣に当たるところだった。

魔王は一瞬のうちに視界がぼけたので驚いたらしく、行動が少し遅れている。今の一瞬だ。そう思った俺は、先ほど考えた作戦を發動させるため、詠唱を始める。

「《水の盾>ネロアスピダ<》」

俺の周りに炎耐性がある盾を一瞬で作る。

「《物質作成>イリコズイミウルギア<》」

最後に、油を作製!

「なっ!？」

魔王が吃驚した。上の三つはすべてが簡単な魔法だが、剣を振るう時から、避けたときまでに、三つの魔法を發動されるとは思っていなかったのだろう。とつさの判断で發動させた魔法だったが、偶然にも、三つの魔法以前に發動させた魔法で、かなりの量の魔力が練られていた。それを魔法として具現化させる時間など、ほんの数

刻で十分だ。にしても危なかった。魔法妨害を発動するほど魔王が冷静だったら、まだピンチは続いていただろう。

灯火のように揺れていた火に、油が着火する。爆発が起こる。轟く轟音。なんとか水の盾で自分は守る。衝撃が俺に当たる。熱くはないが痛かった。

え、これだと、俺水の盾で守り切れてなくね？

俺は後ろに吹き飛んだ。

火による火傷は水の盾の効果で無かったが、衝撃と音を考えに入っていた。衝撃でかなり吹っ飛ばされ、結構な箇所を打撲している。それに耳もまだ痛い。予想以上の音がした。

「《光の救済>フォスアナクフィスイ<》」

俺の周囲を光が包む。それと同時に痛みは和らぎ、外傷が消えていく。

「便利な魔法だなあ」

俺は感慨深く呟く。ふと思いついて、魔王が居た場所の方に目を向けると、そこにもう魔王は居なく、魔王を倒したと証明できるものも何もなかった。さらに、付近一帯が先ほどの爆発により、廃墟といってもいい程の状態だった。

「やりすぎだな……」

というか、ソラは大丈夫なのだろうか。全く考えていなかった。

これに巻き込まれたとなると結構やばいな。

「大丈夫ですよ……危なかったですけどね」

「おお、よかった！」

ソラが生きてたのは嬉しいな。うん。同じような境遇だしな。

「まあ、ご主人様とその怪物が戦っているとき、私は街の方に避難していましたからね。危なかったです。それにしても……」

ソラが街の方を向く。俺もそちらに注意を向けた。怒声が響いている。「今度は何があった!？」と聞く男が居る。

「やべえな」

こんな所に人間が居るなんて、おかしいな。普通は先ほどの爆発

で居なくなっているか吹き飛んでいる。

「逃げるか、壊すか、か」

俺は悩んだ。

二十四話、最終破壊とか旅立ちとか（前書き）

これにて、一章が終わります。次の話から二章が始まります。

二十四話、最終破壊とか旅立ちとか

結論から言おう。俺はとりあえず逃げた。だがこれから街は壊すつもりだ。俺は強欲なのだ。どちらかしかやらないとか、勿体ない勿体ないとは本当にいい日本語だな。

「これでよかったですか？」

ソラが俺に聞いてくる。

「ああ、問題ない」

時間はあるのだ。何も問題はない。まあ、壊すのが少し遅れるのと、壊す現場が見れないのがネックだが、気にしたら負けだ。でもやっぱり壊す現場は見たかったな。仕方ないか。

「まあ、少し名残惜しいがな」

やっと宿屋に慣れたところだ。真つ当な人間としてこの世界で生きていくのなら、拠点としてこの街は居心地が良かったと思うな。果実店の娘はいい奴だし。殺すと思うけどさ。

「じゃあ、そろそろやるか」

結構な距離を街から離れた。いや、正確に言うと、被害が及ばなそうなギリギリの範囲に逃げたということだ。まあ、巻き込まれたくは無いが、状況は見たい。なんという二律背反な心情だろうか。

まあ仕方ない。殺人者は多分被害者を見たいのだろう。殺人者の心情なんて知らないが。いや、俺が殺人者か。

「《炎の檻>フロガクルヴィ<》」

「くっ」

精神力をこつそりともっていかれるような感じがした。

「大丈夫ですか！？」

ソラが焦って聞いてくる。問題ない。

「大丈夫だ。範囲を広く設定したからな。意外と魔力を喰われた」
街の門に部分配置という方法もあったが、街の外壁を壊さないと
も限らない。そう思い街の外壁の周り全域に檻を落としたが、予想

以上の魔力消費量だった。

「あと一つ、魔法を使わないとだしな」

綺麗だろうな、

「《地獄花火>コラスイルルディフォティア》！！！！！！」

花火と人の血と肉。

大爆発。そう形容するのが最も適当だろう。が、魔王戦の無骨な爆発とは違う、美麗な炎。開いた花のような炎。本来ならば空中に打ち上げられるもの、と言っても元の世界の話だが、それが、街を、襲い、破壊し、蹂躪する。

大きな音と共に、街は吹き飛んだ。街から吹き飛ぶ人々もいるはずだが、何故か吹き飛んだ奴はいない。

「何人が生き残ったのかねー」

俺は呟く。街を一斉に壊すときは、基本的に中にあるものも全て消えると考えてもいいだろう。まあ、事前に食料や必要なものも持ってきた。大丈夫だろう。

「これからどうするんですか？」

確かにどうするかなー、と俺は一瞬だけ考えた。まあやることはひとつしかないけど。

「あの街はもういい。まだ生きている人間はいるだろうが、わざわざ全員殺すのは面倒だ。まあ、檻も直に消えるし、何も問題はないだろう」

「そうですか」

無関心っぽいな。まあ、自分を奴隷として幽閉した街なんてどうでもいいのかな？

「そういえば、奴隷として売られていたのは何日くらいなんだ？」俺は思いついたので聞いてみた。

「二ヶ月くらいですかねー。意外と売られないもんだなーと思いいながら、まずい飯を食っていましたよ」

「そうか」

聞いたけど特に感想は持てなかった。なんでだろうな。

「まあ、そんなことはどうでもいい」

「ご主人様から聞いてきたじゃないですか」

「それもそうか、まあいいじゃないか」

「えー」

うるさいから無視する。悪いのは俺だと思っけど。

「とりあえず、世界を壊すたびでもしようぜ。こんな感じにたくさん
の街を壊す旅だ」

「なんとも前途多難な旅ですね。やったとことがある人がいたら尊
敬半分畏怖半分くらいですかね」

「やろうとしている人がいたら？」

「侮蔑全部ですかね」

「お前奴隷のくせに結構辛辣だよな」

「奴隷ですから」

「意味わかんねー」

殺しの後だというのに、軽快な感じで話が進むな、と俺は思った
まあ、俺もソラも殺したという事実を身近で感じたくなかったんだ
ろっ。

「さて、行くか」

話を切り上げて、次の街に向かうことにする。

「そうですね」

と、ソラも続く。

「ところで、」

どうしたんだ？

「馬は何処ですか？」

やべえ、買うの忘れていた。

俺たちの旅は、次の街までは徒歩らしい。次の街に馬があると良
いな。

二十五話、村（前書き）

二章スタートです。

二十五話、村

俺がこつちの世界にきてから、三ヶ月が経つただろうか……

「なにもない草原だなあ」

俺は眼前の新緑を見て、こぼした。

「そうですねえ」

ソラが同意する。結構な田舎に来てしまったようだ。街の方が壊しがいはあるんだがな。

「なんか見たことがある気がしますね……」

「おっ！ まじか」

「といつても記憶程度で、具体的どんな場所かまでは思い出せませんね」

「そうか……」

俺は残念そうな顔になる。仕方ないだろう。と割り切ることもできるが、道案内ありの旅路も一興だと思うんだ。

「にしてもものどかなところだなあ」

「懐かしい感じがしますねえ」

率直な感想だ。のどかな場所なんだ。俺らはゆつくりと歩いた。そういえば馬はまだ連れていない。というか、もう連れる気はない。ミルド帝国の始まりの街（俺らがそう勝手に呼んでいる）で、馬を得ようとしたのだが、次の村で馬を得てみると、意外と使えなかった。

なぜなら魔法で強化した足の方が早いし、スタミナも案外魔法で何とかなる。簡単に言う魔法マジすげーってことだけだ。

「馬は管理とか大変そうだな」

ふと思いつてみる。

「買う必要ないんだから考えても意味がないと思いますよ？」
それもそうか、俺は納得した。

俺の視力で何とか村が見えた。勇者補正で視力も良くなっている。マジ便利。

「えっ？」

ソラが驚いたような声を上げる。

「どうした？」

俺は聞いた。まあ、聞かないなんて選択肢は無い。三ヶ月の旅で俺とソラの親交も深まった。元の世界基準で友人以上恋人未満レベルのつきあいだろう。

「いや、確証はもてないんで……今は言うのは遠慮しておきます」
若干口調が固くなったな、と思った。

「そうか、ならいいや」

まあ、わざわざ言いたくなさそうなことを聞き出すほど俺は鬼畜じゃない。逃げまどう人を追って魔法で殺すのは鬼畜ではないのか？ と聞かれたら迷わず鬼畜ですと答える気がするので、俺が鬼畜なのは事実なのだろうが。

だが、歩くほどに少しずつソラの顔が青ざめていく。

「大丈夫か？」

風邪でも引いたのかと一瞬思ったが、ダルそうではなく、恐怖心なような感じで青ざめているので、病気ではないだろう。

「多分、多分なんですけれど……」

予想は大事だ。多分。先入観を植え付けられない程度には大事だろう。うん。そんなたわいもないことを俺が考えているうちに、ソラが決心したのか次の言葉を紡ぐ。

「ここ、私の村かもです……」

「え……？」

また新しい波乱が、幕開けしたようだ。

二十六話、確信

村に入るにつれて、ソラの疑惑は確信に変わっていった。

「絶対に私の村ですね……」

街から100m程度離れたところで、完全に確信にと変わったようだ。

「どうする？　ここから速攻で壊してもいいし、中に入ってもいい。お前の村だ。お前に決めさせてやるよ」

俺は言い放った。まあ、ソラの村だ。ソラに決めさせても良いだろう。まあ、最終的な決断は俺がするけどね。ソラじゃ村壊せないし。

「どうしますかね……」

そうソラが言っている間にも、着々と俺らは村に近づいている。

「まあ、入ってから壊しても良いしな。選択は無限だ」

「じゃあ取り合えず入ります……お別れもしたいですね」

「そうか」

殺人鬼と旅をしても、性格は殺人鬼に染まらないらしい。まあ、村長は嫌っても、元彼は嫌っていないのだろう。まあ、村長ともお別れをしたいような人なら、俺との旅にはついてこない筈だしね。あくまで持論だけど。

村は、貧乏そうだった。見るからに活気がない。始まりの街と比べる必要もないほどだ。

「寂しい村だな……」

ついこぼれでる。

ソラに聞かれたら悪いと思うが、俺の率直な感想はこれなのだ。ファンタジーでの村と聞くと、隣人同士の結びつきが強く、貧乏でも和気あいあいとしているイメージが強いと思うのだが、この村にはそれがない。沈んでいて、道を通る人々にも、会話があまり見あ

たらない。

「前よりも酷くなっていますね……」

ソラが村にいる頃より酷くなっているらしい。何故だろうか。

「活気が出てもおかしくないんですけどね、街からの税金はなくなりまし」

「殺人鬼が来る可能性があるから沈むんじゃないのか？ 税金なんて命よりは軽いだろ」

「税金は重いですよ。生活できませんしね。一時の喜びか、永遠の苦しみか、どっちを取るかという問題なんですよ」

「というか、事実暗くなっているのに、明るい前提のこの話って意味があるのか？」

「ないですね……」

自分の村が暗いことに辟易としているのか、ソラ自身の顔にも陰りが出ている。

「大丈夫か？」

俺は聞く。

「まあ、この村のみんなよりはいい生活をしていましたからね。弱音なんて吐いてられません」

ああ、そう言えば料理の魔法があつたから、元の世界っぽい物も簡単に作れたな。ソラは初めて食べたとき感激してた。

「といつても、村がこんな惨状なのは結構来る物がありますね」

「俺の住んでいたところは昔から平和だったからね。あんまわかんねーや」

こつちに来るまでを少し思い出す。戻りたいなあと、思うが、戻する方法なぞわからない。

「いいですねー、元の世界は。地球、でしたっけ？」

「ああ、良いところだった。本当に」

過去は戻らない。戻れない。戻りたい。

村を歩くが、やはり陰鬱としている雰囲気は何処も変わらなかつ

た。一つ思ったのは、村としては大きいな、と思った。これまで見てきた村の中で最大級の大きさだった。

「どうします？ 行きたい場所があるのですけど」

言いづらそうだ。何か思うことがあるのか。俺はいない方がいいかもしれないな。わざわざソラの過去に入ることもあるまい。

「俺がいけない方がいいか？」

まあ、行きたくないと言えば嘘になる。でも、魔法を使ってまで行きたくない。本人の意思は尊重したいってところだ。

「ありがとうございます。一人で大丈夫です」

「じゃあ、俺はさつきあつた、宿屋>パピヤ<にでも居るな」

大きなアヒルの彫像が飾ってある宿屋だった。珍しい宿屋もあるものだな。

「わかりました。では、また後で」

そう言つとソラは歩きだした。ここは尾行でもせずに、素直に宿屋に行くか。

二十七話、暇とか飯とか

手持ち無沙汰だ。暇だ。

ソラがなかなか帰ってこない。というか、自分自身のこらえ性があまりないので、ずっと座っているというのは苦行以外の何物でもない。

「なんかすっかなー」

だが、やる気も起きない。やる気は出ないが、何もしないのも嫌だ。なんて二律背反した思考だろうと自嘲。

「寝るかなー」

安眠を貪るのも必要だろう。この世界に来てから警戒することが多かったので、安らかな眠りにはあまりついていないような気がする。幸い今は宿屋にいる。寝ても問題はない。

「真昼間から寝るなんて、元の世界ではあんまなかったなー」

と、思いながら、俺は眠りについた。

「ご主人様ー？ ご主人様ー！」

五月蠅いな。俺は眠っているんだ。どこの世界でも眠っているのを邪魔するのは苛立つ。果てしなく苛立つ。

「うう！？」

俺は呻き声を出す。

「あー、よく寝た……？」

外が暗い。腹の中は空腹を訴えている。

「今何時だ……？」

一瞬で意識が覚醒した。この世界に来てから寝起きは良くなった。警戒しながら寝ることが増えたのもその一因だろう。

「正確にはわからないですけど……七時位じゃないでしょうかね」

「七時か……」

この宿屋って飯出してくれたたっけかな？ 忘れた。出してくれるといいな。

「飯食いいくか？」

「そうですね。どうか適当に食べに行きましょう」

ソラの口ぶりからすると、この宿屋で飯は出ないらしい。まあ、仕方ないか。

「じゃあ、行きますか」

完全に覚醒した意識と、ソラと共に、俺たちは飯屋に向かった。

「うまいな。これ」

刺身を食いながら感想を表す。なんの魚かはわからない。元の世界にあった魚じゃないよなー、と思う。

「この食堂の旨さは折り紙付きですよ」

ソラも至福の表情を綻ばせながら同意する。やっぱ、現地の人に案内を頼むといい店に連れていつてもらえるものらしい。

「ところで今日は何処行つたんだ？」

気になったから聞いてみた。無神経かもしれないけど、まあ死ぬわけでもあるまい。

「ああ、ちよつと父さんの家に行きました。無駄に喜んでましたよ。結末も知らないで」

彼氏の家にはいかなかったのかな、と思ったが言うのはやめた。辛い感情もあるのだろう。

「そうか。元気そうだったか？」

「はい。元気そうでしたよ」

先程までの至福の表情とは一転し、こちらからはなかなか伺えないような微妙な表情になる。

「まあ、こちらの身を無駄に案じてきたのは辟易としましたが。売ったのは自分自身ですのにね」

ああ、憎めないのか。瞬間的に俺はそう思った。なぜかはわから

ない。

「お前も大変なんだな」

誰にでもあるのだ。忘れたい過去が。俺が殺した人間にも。ソラにも。俺にも。過去を引きずって死にたくない。だが、過去は取り戻すことはできない。

「まあ、頑張りますよ」

微笑んでソラが言った。俺も頑張らないとな。と、思う。

話をしているうちに飯は食い終わった。満足だ。

「宿屋に行くか？」

「そうですね」

俺たちは二人、宿屋に帰った。

二十八話、視点をソラに移したいくらい暇な話（前書き）

短いので、本日は二話投稿します。

二十八話、視点をソラに移したいくらい暇な話。

次の日。俺たちは清々しいとは言えない朝を迎えた。なにより前日の昼寝が堪えたのか、俺の寝起きがすごく悪い。とにかく悪い。死にそうだ。

「うううう……」

前日より一層酷い呻き声をあげる。

「大丈夫ですか？」

ソラはしっかりと起きている。

「少し……待つてくれ……」

最近はやさしい魔法をゆつくりとなら無詠唱で唱えられるようになった。《朝の覚醒》。念じると、先ほどのまでの眠気が嘘のように消える。

「おはよう」

「おはようございます。ご主人様」

ああ、なんと清々しい朝になったことだろうか。

「今日はどうする？」

朝の諸々の支度をやり終わり、俺はソラに向かい聞いた。簡潔に言くと、もう俺には目的がないのだ。俺だけならとくにこの村を破壊して、次の目的地、すなわち次の破壊する場所を求めて、旅に出ていることだろう。だが、この村はソラの村だ。要するに、行動は殆どがソラ任せになると言うことだ。

「どうしますかね……」

ソラは悩んでいるようだった。

「とりあえず、元彼氏でも探してみます」

ああ、探せるんだな。俺との圧倒的な違いだった。嫉妬の炎は当然のように燃えた。だが、意味はない。嫉妬したところで、俺が元の世界に戻ることはなく、家族、恋人、友人、親友。全ての人々に

あうことはできない。

「おう、わかった。いつてら」

俺は苦しみを心に押し込めて、ソラに告げた。

「はい。ありがとうございます」

ソラが宿屋から出ていく。それを見送って、おれは、はあ、とため息をついた。

「元の世界に、戻りてえな」

誰もいない宿屋の部屋で、一人呟いた。

嗚呼、なんと暇なことか。

やることがない。村には出たが特に見る物はなかった。すごく暇だ。早く壊したい。娯楽が欲しい。

「はあ……」

いろいろな思いを込めた溜息を一つ。

「ただいまです」

ソラが戻ってきた。

「おかえり」

俺は挨拶を返す。

「どうだった？」

聞いてみる。好奇心は猫を殺すらしいが、気にしない。大事なもののだろうから。

「みつめましたよ。結構やつれていましたね。まあ、私と会つと元気になってくれましたけど」

そう語るソラは果てしなく上機嫌だ。

「そうか」

一言呟いて、俺はベッドに身を預ける。聞いても辛いだけだな。と悟る。

そんなこんなで、今日一日は過ぎていた。嗚呼、平穩のなんと恋
しきものか。と、後になって思つかもしれない。

二十九話、異変

異変は夜のうちに起こるものらしい。昨日とはうって変わって、清々しい朝の目覚めを俺は迎えた。だが、空気が暗い。自然な暗さではなく、人為的に寄った暗さ。だが、完全に人為的でもなく、微かな自然が残る。そんな暗さだった。

明らかにおかしい。

「何があつた？」

一人呟く。ソラはまだ寝ていた。暗い空気はソラから出ていないことを確認し、安心する。だが、暗い空気が出ているのは事実だ。とりあえず、ソラを起こそう。そう思い、ソラの方へ動く。

「ソラ、起きろ。朝だ。何か異変がある」

端的に要点を述べながら起こす。ソラは起き始め、

「う……？ 何があつたのですか？」

質問を返してくる。

「何か、空気が暗い」

抽象的にしか聞こえそうもない言葉で、俺は言う。

「はい……？ 何がですか？」

そついうと、もう一度ソラは寝始めた。確かにソラを起こすには不確定な動機だったなあ、と、反省する。

だが、それ以上良いと思われる起こし方など、俺には思いつかなかった。強制的に起こしても良いが、安眠を貪っている中、不確定な要素で起こすのも悪いと考える。

「仕方ないか」

実際どんな状態が見てきてから、起こそうと思い、一言だけつづやくと、俺は宿屋の部屋から出た。

外に行くと、暗い空気はさらに強く、暗くなっていた。明らかにおかしい。

「なんだ……これは？」

俺は疑問の声をあげる。だが、疑問だけでは意味がないと悟り、魔力を練る。

「《探索>アナズイティスイ<》」

詠唱が終わり、この暗い空気の正体と、発生源を探る。自分から調べることは大切だ。

探り終わった後に俺の口からでてきた言葉は、簡潔なものだった。

「悪魔……憑き？」

この村は、悪魔に憑かれているらしい。

昨日はそんな様子を微塵も見せなかった。隠れていたか、昨日の夜か。判別する手だてはない。そして、目的もわからない。八方塞がりな思考を中断し、悪魔憑きの力が強い方向に向かおうとした、

刹那。

斜め後ろ後方に、気配を感じた。

「まだいだのがあ！」

奇声をあげながらこちらに迫り来るのは、人間だった。

人間なのは確かだ。ただ、肌は黒く濁り、持ち寄る空気が変わっている。それを俺は敏感に感じ取った。

そう、悪魔憑きの人間だと。

「ちっ」

一つ舌打ちをする。やつかいだ。瞬間的にそう思う。

「《神託の炎>マデイスフロガ<》！！！」

とつさに呪文を唱える。神の加護を受けた炎が悪魔に憑依された人間を焼き殺す。

「ぐばあ！？」

もはや人間の声とはとれないような悲鳴をあげ、倒れていく。

「ふう……」

これは厄介なことになりそうだ。俺は自分が使った魔法から微か

に出ている、魔力の残滓を感じながら思った。

三十話、伝令

宿屋を駆け上がる。元の世界なら既に体力を切らしていたと思われるスピードを維持し、宿屋の階段を駆け上る。宿屋のおばさんに怪訝な目を浮かべられたが、気にしてはいけなさと自分に言う。まあ、宿屋のおばさんが悪魔に取り憑かれていなかったことを、少しは喜ぶべきか、それともこれから殺さなくてはいけないことを、悲しむべきか、走りながら考えた。答えはなかった。

ドアを開ける。

「おい！ やばいぞ！」

俺は怒声を発する。

「はい……？ 何かあったのですか？」

目は覚めていたが、まだ眠そうな調子でベッドの上に座っていたソラは言った。

「この村の人間が、悪魔に憑かれている……」

怒声からうって変わり神妙な俺の声。それに対してソラがあげた声は、

「は……？」

疑問だった。なにがなんだか解らないと言う目をしている。俺は感覚的にこの村にきているのが悪魔だと解るが、一般人であるソラは解らない。こんなところで一般人であるソラと勇者補正が働いている俺とで差がでると思わなかった。少し魔法を考えた。文字が頭で踊った。

「《魔法の贈り物>マギアドロ<》」

詠唱する。自分に働いている魔法の効果を、他人に渡す呪文だ。

先ほど使った探索>アナズイテイスイ<の魔法をソラに渡す。魔法がソラに流し込まれる。流し込まれた瞬間、ソラは驚愕の顔を露わにし、

「どうするんですか？」

すべてを理解したように、俺に質問をしてくる。

「とりあえず、この村の悪魔が取り憑かれている人間。悪魔憑きを倒そうと思う。殺すつもりだが問題ないか？」

少し残酷なことを聞いてみる。いや、聞かなければならない。俺の旅の目的上、いつかはこの村を壊すことになるのだ。ソラに恨まれたとしても、壊すことに、人間を殺すことになるのだ。

ソラは悩んでいる様子だった。残された時間は余り無いと思う。何故なら部屋の外の悪魔の気を感じできる程度に、悪魔の力は憑依されている。しかも昨日はこの気配を感じられなかった。即ち、この悪魔は一晚でかなりの人間に取り憑くことができる上級な悪魔だと言ふことだ。

そんなことを考えているうちに、考えはまとまったらしい。

「問題ないです。未練は沢山ありますが、ご主人様の目的に沿うのも奴隷の役目だと私は思っていますから」

陰鬱な微笑みを浮かべながら、

「壊しましょう。この村を。この村をおそった悪魔を」
言つてのけたのだった。

ソラの決断に、一瞬俺はこの村を残そうか迷った。だが、悪魔が居るとなれば、この村から出してくれるか解らない。結局は壊すしかないのだ。いいわけを自分で作り納得させる。仕方ない仕方ない。心の中でつぶやく。

「じゃあ、行くか……」

微妙な顔で、ソラは「はい」と頷いたのであった。

三十一話、人間殺し

溢れる。人と認識できても人間と言いたくないもの。所謂ゾンビに相對したときの気持ちだろうか、としばし考える。だが、實際はゾンビほど人間をやめたわけでもなく、とり憑かれた「だけ」の人間なのだ。

「くそっ」

苛立たしげに緋色の剣を、俺は振るう。斬っても斬っても終わらない。憑かれ人の山。死体は辺りに散乱し、この寂れた村にこんなにも人がいたのだろうか、俺は驚愕する。

傍らを見ると、ソラもしっかりと敵を斬っている。悲しみの顔で時々顔を伏せながらも、襲ってくるものを斬っている。勿論ソラ単体では、剣を振るう力など無きに等しい。俺の身体強化魔法を使つてやつとだ。無理矢理俺に従わされる魔法を使われなくても、しっかり斬り殺すといつてのけたあたりに、覚悟というものを伺うことができた。

因みに、なぜこんな無意味な思考を延々と続けているのかというと、ゾンビのように、津波のように、わらわらと襲いかかってくる人間に、意識を向けるのが疲れたという位のものだ。

「はぁ……」

そろそろ魔法で一掃するかな、と考える。

自分への被害をなくすために一歩退くが、人間は、俺の方向へしつこく迫ってくる。

「ちっ」

舌打ちを一つ。そして魔力を練る。

「《束縛>ペリオリズムス<》!!」

辺りの人間全体の動きを止める。

「ソラ!!!!!!」

叫ぶ。それに反応してソラも後ろに下がる。俺と同じくらいまで

下がったところで……

「《束縛>ペリオリズムス<》……！！！」

ソラが受け持っていた人間の動きも止める。うまく成功したのを見、俺は新たな魔力を練りながら、束縛を解除せず、封じ続ける。溜まった、

「《熱き隕石>ケオメテオリティス<》……！！！！！」

上空から降る隕石。それは肌の色が変色した人間の肌を焼き尽くす……

轟々と燃える炎。人間は燃え尽きた。

「ふう……」

一つため息をもらす。が、そんなことをする暇も無く。

「ぐがあああああああ！」

後ろから新たな人間が迫り来る。

「多いなあ！」

俺は苛立ちを声にぶつけながら、剣を握る。隣のソラも同じようにしている。

俺はかけ声と共に剣を振るう。敵から見ると降りかかる剣が、聞くには嫌な音を残しながら肌に食い込む。

「ぐがあああああああ！」

迫り来るときと同じような悲鳴をあげ、人間は倒れる。

空気はまだ澄んでいない。悪魔はまだ居るし、とり憑かれた人間も数多くいる。

この村を見捨てて次のところに進んでも構わないが、夜寝ているときに襲われるのは、辟易とするな。と思考を取り消す。ゴーレムとかを召還したいなと思っても、俺は召還魔法が苦手だ。

「次を、探すか」

結局俺たちに残されている道は、この村の人間を皆殺しにする事だけらしい。

三十二話、彼女は……（前書き）

こうしてみると自分のタイトルを付ける際の適当さは嫌になりますね。

三十二話、彼女は……

惨殺、斬殺、惨殺、斬殺、惨殺、斬殺……………

積み上がる死体。流れ落ちる血液。目は白目をむくのが多く、焦点など保たれるはずもない。そこに俺は立つ。

「多いな……………」

死体の山を背にしながらつぶやく。その間にも前から横から後ろから斜めからと、数多くの人間である筈の者共が押し寄せる。

また、繰り返し。そう思う。この量的に、他の村からも呼んだんだろう。本当にうつとおしい。さっさと世界を壊させてほしい。

「!？」

声にならない悲鳴。あげたのは自分ではなく、隣にいる少女。

「ソラ？ どうした？」

俺は聞く。聞いている間にも人間共の群は迫るが、負けるはずはないので、そこまで気にしない。

「あれ……元彼です……………」

戦場でそんなくだらないことを、と、一瞬ばかり思った。だが、重大なことなのだろう。気持ちの整理がなにもつかずに、別れた人間ほど名残惜しい者であり物はない。突然過労死した肉親然り、家庭の事情により、転校する友人然り、だ。

「おまえが殺すか？」

何気なく俺は聞く。俺が殺してもいい。だが、引きずってしまわないだろうか？ ソラは、彼のことを、延々と引きずることになるのではないだろうか？

俺にはわからない。俺は朱里を殺そうとは思わない。この状況ならすべての勇者補正により与えられた技能を以て、元に戻そうと尽力する。ソラにそれを求めることはしない。なぜなら彼女は非力だから。だが……

決別くらいはさせてあげてもいいのではないだろうか？

元彼を殺すのはつらいことかもしれないが、いや、辛いことだろう。だが、元彼を殺さないで、彼女は前に進めるのだろうか？

俺にはわからない。故に質問した。彼女ならそれを汲み取り、しっかりとした自分の答えを出してくれるだろう。異世界という現実から逃げ、この世界に暴虐という現実逃避をしている自分とは違う結論が出せるはずだ。俺はそう思う。

「わかりました。私が決めます」

敢えてだろうか、殺すという表現を用いずに、ソラは答えた。何故かはわからない。いや、心の奥底では、俺の意を汲んでくれたとは理解しているが、もっと表面的な何か。

まあ、一つ言えるのは、彼女は決別するということだ、彼と、

「わかった。俺は全力でサポートしてやるよ」

この世界で旅の仲間であり、友人である、ソラの重要な局面だ。俺が補佐をせずに、誰が補佐をする。そう決めると、俺は瞬発的にダッシュをした。

あれ？ 俺元彼が誰かなんて知らないや。

あちゃー。ミスった。このままだと巻き込んでしまうかもしれない。急ブレーキ。急旋回。もう一度ダッシュ。

後ろに戻ってきた俺にソラは怪訝な目をする。

「元彼って誰？」

「あれです」

ソラが指さす方向には、悪魔に取り憑かれても、イケメンと言えるほどの美貌の持ち主が居た。あれは全世界の非リア充の敵だな、と俺は思う。殺さなくてはいけない、と、先刻した決意を忘れそうになる。嗚呼、駄目だ。一瞬で思い直す。

「わかった。アイツ以外を倒せばいいんだな」

「はい、お願いします。ありがとうございます」

さて、イケメンを見せられた恨みを晴らしますかね。世間ではこれを八つ当たりというらしいが、気にしては駄目だ。世間なんて見えないのだから。

三十三話、決断

人間が倒れたときの音が次々と聞こえてくる。俺が振るう剣が、一人、また一人と、着々と倒し、剣先を血で真っ赤に染める。人の死体廃棄場は、少しずつその数を増やし、憑かれている人間は倒れていく。

「昨日ぶりですね」

元彼と相對する決意をしたソラの声が聞こえる。始まったのか。俺は戻れない。彼女は戻れる。いや、わからない。戻れないかもしれない。だが、これは彼女の物語であり、俺の物語という過去ではない。俺は彼女の物語を観客という耳で、聞きながら、斬殺する。

人間を。人間を。斬り殺す。少しでもソラが集中できるように、少しでもソラとの戦いに乱入する人間が減るように、俺は剣を振るう。観客として、乱入者を減らし、最高の物語になるように。舞台の上のために振るわれている緋色に光る剣。それは振るう度に炎をまき散らす。

「だれ、だあ！？ ああ、ゾラ、があ！？」

元彼の声は響く。濁点まみれの声は、観客の耳に響きわたる。まだ、憑かれていない者には、確かな悲壮感を呼び寄せる。

その中で俺は斬り続ける。一人また一人と、舞台の為。

「モトハル、あなたも憑かれてしまったんですね……私のことを憑かれています覚えてくれていたのはありがたいです……本当に……」

ソラは元彼、モトハルといったか、にたいしても敬語口調なんだな、とたわいもないことを考える。その間にも死体は斬られ積もる。「あ、あ？ づがれ、でいる？ おれ、ばぜいじようだぞ？ なにをいっでるんだ？ ゾラは？」

「そうですね、わからないですね。戻りたいですね。昔に。戻れるんでしょうか？ 私にはわかりません……こんな状況は運がないという一言で片づく、仕方がない事なのかもしれません。ですが、

それでも、壊れている貴方を見るのには……

確かに後悔と愛情が織り混ざったソラ声。憑かれ、皮膚の色が変色したモトハルの耳には届いたのだらうか？　モトハルをちらりと見ると、怪訝な目をしながらソラを見ている。

もう戻らない過去。俺と同じ。そして、もう逢えないのも、俺と同じ。緋色が鈍る。魔力切れか。魔力を込める。

ああ、もう駄目なのか……

剣。俺の魔法によって強化されたその腕と、剣を使い、用意にモトハルという人間の皮膚を切り裂く。この場所に彼女を救える勇者は現れず、ただ居るのは、お膳立てをする勇者のみ。それは勇者とはその場所に居ず、ただの観客として、一人の不幸を聞いているだけ。勇を持つものではなく、只の異世界人。魔王は倒したが、勇はいらなかった。試されることもせず、激情だけに身を任せ。勇者じゃない。そんな者は断じて勇者じゃない……

完全な終幕。

ねられた死体の数は一つ増え、少女は終わったが終わっていない過去を一つ得た。だが、その過去を進ませることはできず、戻ることできない。

三十四話、悪魔登場

「終わりましたよ」

ソラがこっちに来る。ソラが持つ剣の血は、まだ鮮やかだ。

「おう、加勢を頼めるか？」

俺はソラに言う。正直、この人数相手に、剣を振るうのも飽きて……間違えた。だるくなってきたところだ。変わらないとか聞いては駄目だ。うん。

あらかた片づいた。いや、すごい大変だった。普通の人間でも、数でこられたらやつかいだなあ、と思い知った戦いだ。

「この村も焼くか？」

俺はソラに聞く。

「はい。私は問題ないです」

ソラは答える。この村との決別はついたのだろう。モトハルだかつて人のことは、結構残っているかもしれないが、ある程度は吹っ切れたのか、俺はそう思った。だが、運は悪いもので、

「我が僕なる人間を、このような惨き死体へと昇華させたのは、お主等か？」

声がした。声がした方向を向く。黒い、尻尾の先はとんがっている。手に持つは黒い槍。浮いている。角が生えている。悪魔だ。元の世界のファンタジーとかでよく見た悪魔だ。俺は悪魔を見た瞬間そう思った。悪魔を現実で見れたのだ。結構幸せだ。ソラはどうか、と、横を向いてみると、あらかさまに顔面蒼白になっていた。

「あ、悪魔……あの魔王など、一つの呪文で討ち滅ぼし……下界の神と呼ばれる……悪魔？」

解説乙と言いたところだ。というか、そんなに強いのなら、憑依させた人間ももう少し強くすることができたのではないだろうか。俺はそう思った。というか、悪魔は誉められて嬉しかったらしく、

実際は誉めているのではなく、恐怖していたのだと思うが、まあ、兎に角悪魔は喜んで、

「そち、なかなかいいことを言うのう。我の僕とならんか？」

勧誘しているし。どんだけゆるーい雰囲気なんだよ。突っ込みたくなった。まあ、突っ込んでたら話は進まないと思うから、質問させていだだこう。

「えー、悪魔、でいいのか？」

「ああ、我は悪魔だぞ？」

「そうか、ありがとう。そして、俺らを殺しに来たのか？」

そう俺が聞くと、まあ、俺が速攻で殺しても良かったんだが、凄く緩い雰囲気の中、殺すのも躊躇われるし、と、また話が飛びそうになった。

というか、悪魔が驚いて、冷や汗をかいている。

「すっかり忘れてたわい」

悪魔よ、それでいいのか。本当にそれでいいのか。俺は頭を抱えた。なんとも適当な悪魔だ。まあ、敵だと宣言したわけだし、颯爽と殺してあげようか、

俺は瞬速ともいえる速度で、剣を抜き、悪魔へと振るう、が、
「そちよ、我をなめるでない。我だって悪魔の端くれであるぞ」
いとも簡単に防がれた。この悪魔もなかなか強いようだ。

三十五話、悪魔戦其の壱

剣を振るう。防がれる。横でソラの剣も振るわれている。それにあわせ、俺も剣を振るう。防がれる。

「弱いのお」

悪魔は気だるそうに言う。そのまま魔力を練り……

大きい！？

魔力量がとてつもなく大きい。何故だ？ 考える。魔力をしつかりと視る。看破。

この世界の魔法は、発動と強化に魔力を使う。要するに、基本は全部を強化につき込めないのだ。だが、悪魔はそれをやっている。それが魔力を大きいと感じた要因。だが、何故？

発動をさせずに、強化だけだとこちらにダメージが来ない。何故そんなことを……？

「暗黒の書！」

悪魔が叫ぶ。同時、地下、いや、地面から一冊の書物が出てくる。魔導書！？

この世界にきてから三ヶ月と、日は浅い俺だが、何度も魔法屋で聞いた名前だ。魔法屋は、魔導具とかを作るのに便利だから数回通った。と、話が脱線した。元に戻す。

魔導書とは、魔法を発動してくれる本だ。素質にその魔導書が同調すれば、いとも簡単に魔術が使うことができる。問題点は同調しなければいけない点と、魔導書に載っているのは、所謂珍しい……正直に使い所に迷うような効果しか載っていない場合が多い。戦闘で使えない魔法が載っている場合が殆どだが、何にでも例外は存在する。

その、例外を手にしたものが、魔力の強化だけで魔法を使えるようになるのだ。

説明終わり。

「くそっ」

俺は苛立つ。何より魔導書での攻撃魔法は、速く強いと聞いたことがある。そして、完全に向こうは発動できる準備が整っている。

「《黒雨>マヴロヴロヒ<》!!」

どんな魔法だ!?　と思うと、上から雨が降ってくる。そして……
「え……?」

ソラの口から疑問が生み出される。やばいつ、瞬間的に俺はそう思う。この魔法は思っていたのとは違い、攻撃魔法ではなかった。だが、妨害する。

効果を考えると、雨に当たった者に掛かっている魔法効果の消去と、魔力の減退だろう。だが、永続的な強化魔法で多少なりとも身体を強化していた俺と、強化魔法がないと何も戦えないソラの二人のパーティーに言えば、抜群の効果が期待できる。

確実にこちらの痛いところを突く戦い方。単純な戦闘力。どちらもかなわない。勝るとすれば……発想か?

だが、思いつかない。とりあえず強化呪文?　黒雨とこちらの強化呪文どちらが速く発動できるかは明白。その合間に何発こちらにたたき込まれる?

「くそっ」

何も思いつかない。何か、何か。

銃弾。やってみる価値はあるかも知れない。

「《物質創造>イリコズイミウルギア<》!!!!」

鉛だけの銃弾をこの世界に創造……

「《黒の妖精>マヴロネナイダ<》」

囁かれる。黒き怨念の逆流。

「なっ」

消えた。完全にこの世に鉛弾が創造される前に、消された。呪文消去?　四文字の単語が浮かんでくる。どれだけ厄介なんだ。あのスピードで呪文を消されたら打つ手がない……

完全に、八方塞がりといっても良かった。物質創造での、元の世

界的勝ち方が、呪文消去によって防がれる。どうすればいいのだ？

三十六話、悪魔戦其の式

考える……考えるんだ……考えなければ……

八方塞がりの穴を見つけるんだ。穴……悪魔について考える。悪魔？ 弱点。悪魔の対義語……神。俺が神の力を使えるか？ 答えは否だ。どうする？ どうする？ 悪魔についての文献を頭の中で読み漁る。探せ。捜せ。求めろ。答えを。悪魔？ プライド？ プライドが高い！

いける！ が、どうやってプライドを傷つかせる？ わからない。考える。考えるんだ。傷つかせろ……少しでもプライドを……

行け！ 逝け！ 走れ！ 疾走しろ！

俺は悪魔の方に走る。が、悪魔は何の気なしに興味を向けない。これだ。このプライドの高さにこそ穴はあるはずだ。考える。考えるんだ。俺は剣を振りあげる。やっとこちらに興味を向けた悪魔が気だるそうに防ぐ準備を始める。振り降ろす。防がれる。弾かれる。まだまだ！ 振り降ろす。悪魔は少し驚いたようだが、すぐに興味をなくし、簡単に防ぎ、後ろに俺を吹き飛ばす。吹き飛ばされている最中に魔力を練る。このタイミングしかない！ 俺は直感的にそう思った。悪魔が最大に優越感に溺れる場所。そう、敵を倒したときだ。そして……それは今だ！

ためた魔力を術として昇華。完全なる神の加護を受けているわけではないが、大気中にある神の加護を受けたものを気を使って最大限に寄せ集める。それを使い……

「《神の炎>デオスフロガ>！！」

魔法を放つ。神の力と俺の勇者補正。大気の自然。全てを調和させながら融合する。そして、狙いは……黒の魔導書！ 速攻で使われる魔法さえなければ、ある程度対処は容易になる。そう判断した俺は、魔導書に魔法をぶつける。

轟々と、炎をたてながら、魔導書は燃えていく。そして、それを

みた悪魔は、この世のものとは思えぬ形相で、俺をにらみつけてくる。

「お前……やったな？」

そして、それが子供のような無邪気な笑みに変わり……駆けた。

俊足の瞬速。速い。疾風。数々の速き言葉を言い尽くすほどの速さ。それが俺に迫りくる。が、俺は軽く横に避ける。

「!!!!????」

悪魔がなにが起こったかわからないような感じで、素直に疑問符を表現する。素直、その言葉が表すように、激昂した悪魔は悪い方に単純だった。直線的な攻撃。いくら速くても避けるのは難しいことではない。が、怒りに狂い、それさえもわからないのか、単純な攻撃を悪魔は幾度となく俺に繰り返してくる。

「単純だな……」

近くにいたものに聞こえるか聞こえないかの小さな声で、俺の口から呟きが漏れた。それと同時に、悪魔はさらに怒り、空を向く。そんな暇があるのかよ、と心の中で俺はつつこむが、悪魔が何か言っていることに気づく。

「悪魔神よ……なぜあなたは私をお見捨てになった……？」

神頼みか。心の中で一瞥し、神頼み中の悪魔を無視し、魔法の詠唱を開始する。

「《身体強化>ディナトソマ》」

落ち着いた声色で、俺はソラに強化呪文をかける。強化が失われ、隅でうずくまっていたソラは、水を得た魚のように目を煌めかせた。
「はあああああああ！」

まだ悠長に神頼みをしている悪魔に、ソラは剣を振りかぶる。
俺も緋色の剣を、しっかりと握り、走る。

二つの剣が、一つの体に収束する。なぜ自分が負けたのかわからない。そんな顔の悪魔は、最後まで自分のプライドの高さを知ることではなく、地面に倒れた。

三十七話、二章エピソード

人間は、居なくなった。この村には、もう殆どの人間が、悪魔に憑かれた後、俺かソラに斬り殺された。

宿屋のおばさんは、俺がでていくときはまだ人であつたが、結構前に斬つた記憶が朧気ながらある。正直、昨日の今日にあつた人を斬り殺した記憶など、滓かにしか残らないものである。

「終わったな……」

精一杯の疲労感を示しながら、俺は漏らした。本当に疲れた。今日だけで何人を殺したのだろうか。魔法で一発なら楽だが、逃げ出すほどの暇を得られなかったのは、今後の反省点にするべきだろう。「本当に疲れましたね……」

ソラも完全に疲れた様子だ。唯一人のこの村の生き残りは、この村のことなど気にも留めていないようだった。実際考えていることは、精々元彼の事くらいだろう。イケメンだったから名前は忘れた。うん。なんて便利な頭だろうか。

「これからどうするんです？」

さも当然のようにソラが俺に聞いてくる。

「次の場所に行くかな。まだ世界は壊し終わっていないし」

嗚呼、世界よ、待っててくれ、俺を。

ポエマー的な事は似合わないな、と一瞬で自覚した。思っただけで悪寒がする。これから詩を創ろうなどと、考えない方がいいな。

「そうですか」

ソラは頷く。

「おまえはどうする？」

正直、ソラがこの村に残りたいというのならば、非常に残念で、惜しむべき事ながらも、俺はソラと別れたと思う。そして、俺らの人生は分かれて、進んでいったと思う。まあ、たればの話をしていても仕方がない。

「ついていきますよ。勿論」
「そうか」

ソラは空を見渡していた。俺には清々しい風が吹く……と、思いきや。全く清々しくなかった。なぜなら人の血と肉の臭いがこれでもかというほど充満していたからだ。

「おええ……」

俺は一瞬吐きそうになる。

「デリカシーがないですね。折角美少女が、空を見渡すという絵になる光景をやっていたというのに」

「自分で自分を美少女っていうなよ……」

「軽いジョークですよ」

まあ、ジョークを言われたところで、俺の吐き気が収まるわけもなく。まだ吐きそうだ。

「《祈りの光>プロセフヒフォス<》……」

ふう、元氣澁刺。魔法って便利。凄い便利。

「万能ですねえ」

「まあな」

勇者補正には本当に感謝しないといけないな。

「さて、」

「どうした？」

「そろそろ夕刻ですよ」

そう、少しだけ微笑みながら、ソラは言った。ソラの視線は、空の下、地平線に向いていて、

日が、落ちていた。

夕暮れ。綺麗だと、純粹に思う。真っ赤に染まった太陽が、剣と剣のぶつかり合いで、少しだけ壊れていった家々を照らす。廃墟に人の死体。そこに降り注ぐ日の光。何ともミスマツチな光景だった。
「綺麗だな」

が、綺麗だ。人の血の紅と、太陽の朱。時には家の屋根の赤も加わる。大地はしっかりと存在し、幾つかの木が、存在する大地に少

しばかりの存在感を示している。それもすべて様々な紅で汚れ、その上から朱が修飾している。

「行くか」

このままこの場所は残したいと思った。人間が腐敗するのは仕方がない、が、万物が綺麗だといえるような美しさがここにはあった。世界を壊す前に少し壊れていたと自覚できる俺の心も、美しさを感じる正常な部分は残されていた。根本的に壊れているかもしないが、そこまで構わなくてもいいだろう。

「そうですね」

ソラは、無表情に戻り、日は沈んだ。珍しいことに、ソラが同意した瞬間と、太陽が沈んだ瞬間は、同刻だった……

三十七話、二章エピローグ（後書き）

タイトルを編集しました。エピローグとプロローグ間違え、それを約一週間気がつかないとか、少し抜けすぎている気が……疲れているのかな。

三十八話、新たな街（前書き）

三章（最終章）突入です。

また、お気に入りが百件を越えました。ユニークも一万越えました。ここまで来ることが出来たのも、すべて読者の皆さんのおかげです。本当にありがとうございます。そして、これからもよろしくお願いします。

三十八話、新たな街

店では果実が売られ、商売人が、自分の商品をこれでもかというほどアピールする。そんな喧騒がある、大きな街。そこが、ガラム王国の首都、アルデハランだった。

ミルド帝国の辺境にあったソラの故郷の村からの時は、ものすごく早く流れた気がする。村の滞在は殆どせず、一日泊まったら、破壊。町になっても、物資を軽く整えたら、破壊。テンポ良く、破壊の旅は進んでいた。それでも、別の国の首都までの時間はかかり、ソラの故郷の村から換算すると、二ヶ月ほどが経っていたと思う。計五ヶ月。半年ほどの月日を、俺はこの世界で過ごしたことになる。狂気に彩られた復讐の旅を、過ごしてきたことになる。

路地裏。ガラの悪いものに、小汚い浮浪者。真つ当とは言えない人間の溜まり場。少しずつ、そこで俺は破壊を繰り返す。

「《小さき火>ミクロスフォティア》」

仄かに光る火が、人の心臓を焼く。自分がどう攻撃されたかもわからない死に様。ほぼすべての人間が、驚愕を表し、一部は殺されたとも気づかない、現世への絶望の顔だった。

傍らにソラはいない。ソラが買い物をしたいらしいので、俺は暇つぶしに、旅の目的を遂行していた。実際問題、アルデハランは大きい。とてつもなく大きい。一気に壊すのが億劫になる程の大きさ。疲れる。などで、俺はちまちまと殺しているわけだ。わざわざ買い物をしなくても別に旅に必要なものくらい記憶から複写できるのだが、ソラは、買い物そのものに意義があるといった風に、買い物という無駄な行為に勤しんでいる。

「暇だなあ……」

俺がそういつている間にも、一人、また一人と浮浪者は死んでいく。悲鳴が時々上がり、驚愕の顔をする浮浪者もいるが、俺がやつ

たことに気づく奴は居ない。

「はあ……」

憂鬱だ。この世界の全容でも把握したい。あとどれくらいの労力がこの旅に必要なのか、俺は理解していない。理解したいな、その方が楽そうだ。

路地裏からだと、近くに偶然ソラが居た。遅延性発現勇者補正という名前だけは長い特に意味のないもので、俺は自然探索能力を得た。簡単にいうと、魔法を使わなくても、周囲のものの把握ができるということだ。この便利な補正はマーキングができるので、ソラにマーキングしてある。微妙に卑猥な言い回しだな、と自分の思考を自分で自嘲する。まあ、要するにソラは近くにいるのだ。走って会いに行こうか。

ソラは買い物袋をたくさん抱えていた。旅に持っていくにはふさわしくない量だ。

「多くないか？」

俺は聞いた。というかこんなに持っていても邪魔だ。すごい邪魔だ。四次元空間的な場所が欲しいなと思うほど邪魔だ。

「大丈夫ですよ。大体が食べ物ですから」

「食材？ 加工品？」

「食材です」

「キッチンはあるのか？」

「……………！！」

バカだろ。五ヶ月の旅でなにを学んだんだ。こいつは。あの一件以降時々抜けていると思うような行動がでてきたが、今日は一段とひどい。

「仕方ない、キッチンがある宿屋でも探すか」

「そうですね！！」

嬉々とした表情で同意してくる。というか、買い物袋の中身が野菜だらけだ。そんなにおまえは野菜が食べたいか。

「じゃあ、探しますか」

まあ、ここで普通の宿屋を探していたら、普通に破壊の旅が続いたかもしれない。そう思うほどの出来事が、あったことを、このときは気づいていなかった……

三十九話、衝撃

疲れた。俺は果てしなく疲れた。このなんとか帝国のなんとかって首都は意外と大きかった。というか、名前が長くて覚えられ無かった。カタカナ名より東京とかって二文字の方が覚えやすい。日本人だ。こんなところで昔を少し思い出した。

やつのことで見つけた宿屋は、果てしなく豪華だった。キッチン付きの宿屋なんて技術とかが中世レベルのこの世界はあまりないが、さすが首都ということだろう。一応あった。問題は、ハンパなくお値段が高い。明日あたりに宝石を換金しにいかないと、金が尽きるな、と思いながら、とりあえず今日はこの宿屋に泊まることを決定。そして、疲れたから酒場で一杯……

したら食料かった意味がないということに気づく。残念だ。

「見つかったのに何で残念そうなんですか……………?」

ソラが俺に聞いてくる。

「一杯飲みたかったなあ、と思って」

「別に明日も好きなだけ飲めるんですし、今日だって決して飲めないことは無いんですから、元気だして……」

「それもそうだな」

俺はあっさり開き直った。いや、ソラのことだから、部屋から出さないとか言いそう……………もないな。気のせいだ。

「食った食ったあ」

料理は（面倒だったので）全てソラに任せて、俺はほぼ食っただけだった。少しは手伝ったけどね。

「お粗末様でした」

ソラは律儀に言ってくる。にしても、満腹だな。ソラももう動きなくなさそうだ。

「酒を飲む気もでねえや。今日は部屋でゆっくりするかねえ」

元の世界のホテルとは比べるべくもないが、この世界では殆ど野宿だった俺たちにとって、キッチンがあるような高級な宿屋は天国のようだった。ベッドも大きめでなおかつふかふか。しかも部屋に飾られている調度品の数々も風情がある。

「いい部屋だなあ」

いい部屋。それにいい飯。いい寝床。微妙にかぶっているな。まあいいや。俺はこの世界にきてからの中でもトップを争う夜に感謝をした。そして眠りについた……

新しい朝がきた。希望の朝だ。以下略。

ということで、次の日が朝が来た。窓から射し込む朝日が清々しい。完璧な朝だ。自然に起きたことから眠気もあまりない。フカフカベッドの実力は折り紙付きなようだ。

「最高だな」

思わず呟いた。それで、満足したので、傍らというか、もう一つのベッドで寝ているソラに目を向けた。寝ていた。当然だ。

「今何時だろ……」

フカフカベッドの魔力で昼まで寝ていたとかだったら目も当てられない。といっても、時計はないのだが、そこは勇者。勇者補正で何とかする。

「《時間>クロノス<》」

軽く魔法を唱えると、時間が頭に浮かび上がってきた。朝の七時半前。意外と上出来だ。

「ソラ、朝だぞ、起きろ」

のんびりとソラを起こす。

「むう……朝ですかあ……？」

「ああ、朝だ」

「そうですか……」

眠そうな目を擦りながら、ソラが起きてくる。
それから数十分……

俺とソラは、諸々の準備を終え、階段を下っていた。下り終わった。

「博信君……！！！！……」

衝撃。視界が暗転。理解不能。様々な文字が頭を踊る。漢字に直してたかが三文字、されど三文字。その言葉は、俺の元の世界での本名だった。くらりと、意識を手放しそうになるのを何とか寸前で押しとどめる。そして、その言葉を放った彼女は、朱里……………俺の彼女だった……

四十話、束縛

「朱……………里……………」

声で朱里だという確信は持っている。会ってから今まで延々と、永遠に想い続けた少女の声を忘れるわけではない。

「なんで、博信くんがここに……………」

「朱里こそ、何でここに……………」

双方疑問しかでてこない時間。それを打ち破ったのは……

「この方が朱里さんですか……………」

「おい、アカリ、こいつは誰だ？」

各陣営の、仲間の言葉だった。

「ああ、そうだ」

と、俺はソラに答える。

「この方は、博信で、私の彼氏です」と、朱里は、朱里の傍らに
いるゴツい男に向けていった。その男は筋肉隆々で、いかにも脳筋
風だ。背中には斧があり、その斧の大きさは、かなり大きい。それ
を振るわれた人間が、いとも無惨な死体になることは、直ぐわかつ
た。

「そうか、こいつがアカリの彼氏ねえ……………」

俺をじろじろと舐め回すような目で見てくる。正直苛立つ。

「朱里……………」

といっても、こんなところで力の片鱗を見せるわけにもいかない
ので、殺すという選択肢を除外し、朱里に懇願する事にする。

「ええ、カイル。止めて下さい」

それを感じ取ったのか、朱里が、筋肉隆々の男を、止めるような
発言をする。そして、男の名前はカイルというらしい。

「ああ、すまん」

カイルは謝った。俺も別に止めてくれればどうという事もないの
で、カイルに向けていた意識を別の方向へ逸らす。

「というか、本当に何で朱里はこっちに来たんだ？」

「よくわからないんですけど、この国の王様が言うには、転移魔法で……しかも奴隷になる魔法をかけられて、逆らうことも……」

「勿論勇者様は好意的にこの旅についてきてくださるんですね」

朱里の言葉を遮る様にカイルが割ってはいいる。成る程、奴隷の魔法か。何で俺を召還した王様がかけなかったのが気になるが、大方威圧感で恐縮させてから、ゆつくりと奴隷の魔法をかけるつもりだったんだろう。条件によって魔法のかかる効果の大きさは変わるからな。でもさ、俺の彼女に奴隷の魔法をかけた王様を……いや、その親族全員を……いや、その世界に住むものを……俺は許すつもりはない。さらなる復讐の念が燃え上がる。

「あつ、そうでした。はい。王様に、魔王を殺した勇者を殺す旅に行けと言われてるんです……その勇者は、勇者らしからぬ行動……街を壊し、罪もなき人々を殺し尽くす極悪人らしいので、それが本当ならとっても悪い人なので……仕方なく殺しに行く旅に出ることになったんです……幸い私は勇者補正があるので……」

え、ちよつと？ 俺王から追われている大罪人？ まじか。他国から襲われるとは予想外だぜ。というか……朱里の旅の目的は……俺の殺害！？

出そうになる驚愕の悲鳴を俺は何とか押さえた……

そして、これから起こりそうな波乱について、少し胃が痛くなつた。

四十一話、鼓舞

朱里の目的が俺の殺害と聞き、朱里と話たいながらも、早めに話を切り上げて部屋に戻った。

悩む。とても悩む。

この街を破壊したいという意欲は前にも増して高まっている。正直はじめの街と同じくらい壊したい。何故世界は俺から朱里との時間を奪うのか、とても不思議になった。そして、恨んだ。怨んだ。

元の世界で朱里と生きたい。逝きたい。行きたい。往きたい。活きたい。様々な感情がこの四文字に詰まっている気がした。なぜなら人の始まりは生で、人の終わりは逝だから。逝には祈れる。祈るという文字がある。祈るんだ。終わりに。

徒然と意味のないことを考えているなど、思考の中で自嘲する。

嘲る。ちっぽけな存在だ。勇者補正なんか有ったって、俺は昔となくにも変わらない。自分の日々を手にすることは難しい。人生とは理不尽だ。

「ご主人様……？」

俺の思考が長すぎることに気をかけたんだろう。ソラがこちらに視線を投げかけてくる。

「ああ、大丈夫だ。心配かけてすまん」

正直不安定だ。大丈夫とはお世辞にも言い難い。一つため息を漏らし、今後について憂鬱となった。

「それならいいんですけど……」

ソラの声は、俺に届いたが、思考の渦にかき混ぜられ、明後日の方向へと去っていった。

といっても、俺にやることなど旅の準備と破壊くらいしかない。元の世界の技能などこの世界と目的を照らし合わせるととてもではないが使えないものであり、わざわざそれを使おうという時間も無

駄に感じられた。要するにやることがない。いつそ、街を今から壊しにいくのも一つの手だろう。そう思うほどだった。だが……壊すときの朱里の表情が脳裏に浮かぶようで怖い……

どうしようもない八方塞がり。戦闘では機転で突破できるのも、生活では成功が失敗なのかもわからず、どうすれば成功にいくなんて理論も確立されていない。

もやもやする。うずうずする。とてもではないが、宿屋でのんびりと過ごす気分ではない。

「仕方ないか……」

行こう。街を壊しに。なぜなら俺は壊す勇者>カラストロフィプロタゴステイスクなのだから。というかさ、この二つな長いよな誰か変えてくれねーかな。

傍らにはソラ。眼前に広がるは、街の外壁。その奥にうつすらと荘厳な城が見える。城とは、王族の権威の代えでしかない、今更ながらに気づく。だが、そんなこと気に考えても仕方ない。

俺は闘うのだ。朱里と、自分のために。未来のために。この憎き世界に向かい。これは通過点ではない、新たな始まりだ。そして、この街を終わりへと導くのだ。

始めよう。終わりの始まりを、破壊の宴を……

「ready?」

最高に昂ぶった自分に向かい、鼓舞した。

四十二話、破壊の始まり。

「《熱き隕石>ケオメテオリティス<》!!!!!!」

練った魔力を炎の隕石にして、解き放つ。街の上空に隕石は出現し、街へと降り注ぐ。俺は隕石の方向を出来るだけ城方面に落ちるように調整しながら、次の魔法の魔力を練る。傍らに佇むソラは、出番を待ち、自分の持てる最大の力で、俺の強化魔法と自分の力を適合しようとしている。

数秒後……

溜まった。

「《炎の檻>フロガクルヴィ<》!!!!!!」

溜まった魔力を解放して、街の外に炎の檻を作る。少し魔法回路をいじり、少しずつ街の中心部に迫るようにする。魔力を少し耳に分けると、人の悲鳴がよく聞こえる。だが、王族の安否などはわからない。安否確認の魔法は、対象の名前がわからない。

「仕方ないか……」

いきなり魔法以外の発言をしたのに驚いたのか、ソラがこちらを向いてくる。

「ああ、何でもない」

追跡型の魔法でも考えるか、と思うが、俺は狙いの王様の名前を知らない。

「くそっ」

無計画に破壊を始めるんではなかった。後悔する。自分への苛立ちを感じる。このままではどうしようもないと思いながらも、王様くらい事前調査できたじゃないかと批判的な意見が頭の中で渦巻く。「何かあつたんですか!？」

なにもないことくらい、一緒にいるのだからわかるだろう。ただ単に心配してくれているソラにも、批判的になっている。このままではだめだ。考える。

仕方ないか。

走り出す。

それしかないだろう。考えてもだめなら行動あるのみだ。走れ。炎へ。駆ける。地獄へ。途中後ろを振り向くと、しっかりとソラも付いてきていた。

「博信くん……！？」

城門近くに行くと、外からの襲撃に警戒していたのか、朱里を見つける。その体は、元の世界では全くみられない鎧に包まれていて、腰には剣も提げている。朱里を戦場になど出せない。そういう思いがが一瞬で頭の中を駆け巡るが、そもそもこの戦場を作ったのは自分だと認識し直す。

観念する。真実を言うしかない。それしか残された道はない。取り繕っても無意味だ。そもそも、今からやることは朱里の為になる。

「ああ、朱里か、今から、王様ぶつ殺してくるわ」

「はっ……！？」

「なんだとっ……！！！！！！」

疑問の声が城門前に響く。

もう一つの声は……カイルだとか言う、朱里の旅の仲間という目障りな剣士か。あの程度なら一瞬で斬殺できるな、と思考を広げさせる。

まあ、そんなことは関係ない。振り切るだけだ。

「止めるなよ」

まあ、カイルだかという筋肉剣士くらい、ソラが相手してくれるだろう。朱里は……俺は朱里のためにやっているのだ。なにも問題はない。そう心の中で結論づけて、王城に向かい再加速する。

四十三話、肘打ち

走り、疾走し、駆け、逃げる。後ろから追いかけるは、確かな意志を持った俺の彼女。

「博信君！ 何でこんなことを！」

もう彼女の中で、街を壊したのは俺だとわかっていているようだった。向こうも真贋判定>アリフィアブセマ<を持っているのかもしれない。

彼女の問いかけに。俺は答えない。彼女に罪悪感を感じさせるという選択肢を、俺が選ぶはずがない。ソラは俺と駆けるのではなく、剣士を止めてくれるらしかった。だが、今はそんなことは、どうでも良い。

逃げる。彼女を振り切らなければ、俺はこの世界で生きれない。そう、切に感じた。

「仕方ないですねっ……」

なにが仕方がないのだろう。わからない。だが、気にすることもない。彼女も勇者補正持ちらしく、元の世界では俺より足が遅かったはずだが、今では普通に着いてきている。複雑な道や、緩急を使い、振り切ろうと画策するが、ことごとく失敗する。

「殺しの否定>スコトノアンフシュ<！」

後ろから詠唱が聞こえる。解析する。結果、武器効果追加型魔法だと判断。効果検索……否殺。武器から殺害する要素を排除する魔法だと断定。

「！？」

まさか……

彼女は加速。とつさの加速と、先ほどの魔法結果への混乱から、俺は反応が遅れる。そして、

「せいっ！……！……！」

彼女のかけ声と共に、剣が振るわれる。その剣は不思議と恐怖を

纏っていないく、清純な輝きに満ち溢れていた。

危機一髪。俺は自分の位置を強制的に左に移動させた。所謂回避だ。それにより彼女は、剣に重力を支配される。隙ができた。同時に、迷いが俺に生まれる。

この状況で彼女を攻撃すれば、確実に俺は王城までたどり着くことができるだろう。だが、彼女を攻撃したくないという、純粋な意志も生まれていた。が、それなら何故この街を俺は攻撃できたのか不思議に思う。彼女が巻き込まれる可能性も否定できなかったではないか。自分の昔の思考に疑問点を持ちながら、喉に骨がつかえるような感覚を持ちながら、迷う。

剣で攻撃するなど以ての外。肘……俺は肘打ちをした。

が、俺の肘は、悲鳴を上げた。理由、彼女が予想以上に堅かったのだ。当然のことだ。彼女は鎧に包まれている。それに肘打ちをしても、効果などなく、俺がダメージを受けるに決まっている。そこに考えが至らなかつたほど俺は迷ったのかと、頭の中では自嘲するが、肘の痛みからか体は動いていない。

動いていないほんの僅かな時間……そこで彼女は動けるようになった。やばい、直感的にそう思う。彼女は重力に任されていた剣をもう一度自分の支配下に置いて、俺に攻撃をしてくる。受けた攻撃は、手加減されていたのか、俺を少しの距離吹っ飛ばすだけで、終わる。

が、俺だつてただで吹っ飛ばされるわけではない。彼女に対して剣で攻撃できるわけではないが、別の方法で、攻撃を止めることなら容易とは言わないまでも、できないことはない。

吹っ飛ばされている間、魔力を練る。そして、起きあがった瞬間、詠唱を開始する。彼女は剣で攻撃した俺が起きあがれることに驚いたようだが、すぐに魔法を使われると判断して、止めようと動き出す……

「お休み……《眠りの火>キマメフォティア》……………!!」

睡眠を誘発する火が、彼女の眼前に灯った。

四十四話、檻

レジスト。魔法対抗技術。眠りに誘う火は、彼女の魔法耐性との競い合いになった。彼女は俺を止めようと、全力で抵抗する。俺も火に魔力を流し続ける。

数秒が、数分にも感じられるような、時間の流れの中、抵抗に成功された。

「ちっ……」

俺は舌打ちをする。新たな魔力を練ろうとするが、彼女が迫りくる。

右手には剣を持ち、心には意志を持ち、左手は空を掴み、足でこちらに駆ける。右手が後ろに引かれ、剣をこちらに振るおうとする。俺も先程みたいに打たれる気はないので、余裕を持って回避の準備動作に入る。それと同時に、腰から剣を抜く。剣には、まだ緋色の光が宿っていない。が、宿せたら彼女に危害を与えるだけだ。剣は防ぐ為に使う。

彼女の剣がこちらに振るわれる。余裕を持って回避し、詠唱を開始する。向こうはまだこちらの戦闘に慣れていないのかもしれない、詠唱できる間というのは、呪文次第で一瞬で十分なのだ。

「英雄殺しの檻>イロアススコトノケルヴィ<!!!!」

対象の範囲を少なくすることで、魔力量を極限まで減らす。この魔法に込めた意味は……封。

彼女の頭上から、荘厳な雰囲気纏った檻が降りてくる。ただ、それには殺意などの悪意という感情はなく、対象物に対する慈愛に満ち溢れていた。鉄は装飾により、華麗に彩られている。

「朱里、異世界初の、プレゼントだ」 気障な調子で言う。

「!？」

声にならない叫びが彼女から出る

それと同時に、彼女の頭上……檻の中心部から、一つの小さいも

のが落ちてくる。俺が作ったそれは、指輪だった。

「俺はおまえを封じた、屑みたいな王様を今から殺しに行ってくる。朱里には悪いが……そこで待っていてくれ。後でもっと良いプレゼントやるからさ」

「え……？ 私の……為？」

「ああ、後、俺がこの世界の街を壊しているのは……言つのなら、八つ当たりだ。おまえみたいな良い女性メイトと巡り会えたのにさ、こんな世界に飛ばされて……世界を恨まないわけがないだろ。家族……母、父、妹、近所の幼なじみ。よく遊ぶ友達。ネット世界での友達。好きだった本。ゲーム。先生。行っていけばキリがない。そんな元の世界でのすべてのものを、この世界は俺から奪ったんだ。だからさ……

八つ当たりでも、俺はやってよかったと思っているよ。そうでもない、今じゃ廃人だな」

狂っていたらどう。元の世界に依存していた俺は。この世界での新しい生活なんて無理だ。なら……せめて、鬱憤を晴らせるような生活。そんなの、復讐しかないだろう。

「でも、無関係の人間が……」

「ああ、俺この世界の人間は、人間じゃないと思っているから。朱里が、奴隷的立場になったことで、それは増したよ。じゃあ、朱里のための、復讐に行ってくるな」

後ろから声が聞こえる。だが、俺は気にせず走り出した。さあ、殺そうか。朱里を奴隷にした王様とやらを。

四十五話、逃走（前書き）

昨日は投稿できず申し訳ありません。

今日は昨日の分と合わせて、二話投稿しようと思います。
残り三話ですので、明日に最終話を投稿します。

四十五話、逃走

慌てふためく王族。ざまあみろ。

俺は王城に入った。護衛もいるにはいたが、全員俺の敵ではなかった。剣を一降りしたら、血を噴き出して死んだ。呆気ない。

「はあ……」

怒りもこんな光景を見せられたらそこまでは湧いてこない。淡々と、ただ淡々と人間を斬っていく。

「な、なんだ！？ おまえが今回の首謀者かあ！？」

王族はさらに慌てる。

「大当たりだよっ」

言葉を発すると同時に一人斬る。さて、この王様風な人間を斬るか。たぶん王様だろ。そう、剣を降りあげようとした、が

「！？」

部屋の全員が驚く。なぜなら、この状況でガラスが割れる音がしたからだ。向こうからしてみれば、俺に続く新たな進入者、こちらからしてみれば不穏分子。不確定要素が増える。そして、そのガラスを割ったところから、当然ながら人が入ってくる。とてつもない速度で。神速とも、言すべき速度は、部屋の全員を驚愕させ、俺の剣を阻む。

「自分に楔をつけた奴を庇うのか？」

俺は聞く。

「博信君に人殺ししてほしくないですからね」

毅然として彼女は答える。そう、朱里は答えた。

「どうやって檻を抜けてきた？」

「全力で魔法解除しました」

「そこまで俺に人を殺してほしくないか」

「当然ですよ」

朱里が俺を気絶させようと剣を振るってくる。剣は鋭くなくとも、

重く俺の懷へ入ってくる。

「せえいつ！！！！！」

俺はそれに自分の剣を入れて防ぐ。

「なぜそこまでして俺を止める？」

「同じようなことを何回も聞くと幻滅しますよ？」

「ちっ……」

言葉を少し酌み交わしながら、俺らは剣舞とも言うべき美しさを伴う戦鬪を再開する。

剣の音だけが無機質に部屋に響く。少したった頃、そこにいた王様（仮定）が、

「お、お前等は何者だあああああ！！！！？？？？」

大声を出してきた。うるさい。全力でうるさい。苛立つ心を抑え、剣舞へと戻る。が、そんな俺の態度を自分へと冒瀆と感じ取ったのか、

「ぐ、護衛どもお！　なにをしている！　でくの坊を雇った覚えはないぞつ！！！！！」

そういうと、まだ殺されてなかった兵士が、用心棒か、護衛か、全くよくわからないものたちが、恐怖心を持ちながら俺たちに向かってきた。

俺は迷っていた。朱里に殺すなと言われて、このまま殺そうという気持ちと、朱里の言ったとおりに、殺さないで過ごすという気持ちが、心の中でせめぎ合っている。向かってくる兵士を前に、どうするか、と、心の中で唱えた。が、そんなことで事態は好転することなく、朱里との戦鬪は未だに続けられており、兵士たちも迫ってくる。仕方ないので、一瞬剣を打つのをやめ、回避に徹する。それで朱里の剣を避け、左斜め後ろに。そこから向かってくる兵士に向かい、瞬発的に足を加速させる。そして、兵士の頭を、少し強化と念じた腕で、一人一人気絶させていく。が、それをしているのも文句があるのか、朱里が向かってくる。

「そんなに俺に人を傷つけてもらいたくないか……」

観念するように俺は呟いたのだった。

四十六話、乱入

朱里をいなしながらも、少しずつ兵士を倒していく。一人、また一人、と思ったら朱里に阻まれる。倒そうとすると朱里が確実に障害するので、思っていた以上に骨が折れる作業だった。

「せいっ！」

少し高めの声が部屋に響く。それと同時に朱里の剣も振るわれる。俺が兵士を倒すほどに、鋭くなる剣筋。人殺しをさせたくないほどに愛してもらっていることに感無量になると同時に、なぜ俺が朱里のために人殺しをしてはいけないのかという疑問感が何時まで経ってもつきまとう。それは、疑問点という心の中の靄となって残るが、戦闘のじゃまにならない程度には、心の隅に押し退ける。といったも、このままじゃ埒があかない。すこし、剣に入れる力を強くして

……

「仕方ねえっ！」

かけ声とともに、俺は気絶させるつもりで朱里に剣を振るったが、ガキッ！

朱里の剣に阻まれる。そして、もう一度剣を降ろうとしたときに、更なる進入者がやって来た。新たな人は朱里と違い、派手な登場はしなかったが、着実に門から入ってきていた。愚鈍な王たちは気づかないが、確固たる意志を持って、こちらに向かってきている。その速度は少しずつ加速している。誰なのかがわかるほどではなかったが、なぜというのを頭の中に残す。

そんな合間にも、俺と朱里は剣と剣をぶつけあい、貴族や王は、部屋の隅で縮こまっている。一度逃げ出そうとしたが、俺がうまく剣の運びを調整し、出ることが出来ないことを、しっかりと証明してあげた。その貴族は、剣の錆とはなつてなく、部屋の隅で縮こまっている人の中でも、いつそう滑稽に怯えてた。

俺たちの剣と剣のぶつかり合いが数を増すごとに、すこしずつ進

入者も近づくが、こちらの剣と剣の決着はなかなかつきそうにない。いくらぶつかり合っても勇者補正のおかげかどちらの顔にも汗一つなく、朱里はその凜とした顔で、誇らしげに剣を振るっている。完全に高嶺の花なのだ。彼女とつきあうことが出来てよかったと、しみじみと思うとともに、なぜ彼女と俺は闘っているのだと、もさらに自問する。結局思考がループしていると理解し、剣と剣を考えを戻す。

無駄な思考をしている間に、少し劣勢になっていたらしい。

と、同時に進入者が入ってくる。思ったよりも速いスピードだ。そしてこちらに来て……

「せいっ!!」

朱里と一緒にいた男だった。カイルと言ったか、そいつが、今俺に剣を振るってきた。こんな奴どうでもいいので剣をはじく。そして、弾いた剣は宙を舞い……

朱里の首へと、吸い込まれるように刺さった。

四十七話 last episode 世界の下へ（前書き）

最終話です。

四十七話、last episode 世界の下へ

「え？」

彼女の最後の声は、それだけの呆気ないものだった。それが発せられた直ぐ後、何かが床に落ちていく音がして、少し考えたとそれが朱里だと理解した。目の前のカイルも呆然としており、隅の貴族たちもこの展開についていけないようだった。

「はは、はははははははははは、ハシャハハハハハハハハハハハハハハハ」

誰の声かもわからない奇妙な笑い声が部屋に響く。それが一番聞こえているのが自分だと気づき、自分の口から発せられていると、さらに自覚する。意識をしなくても勝手に体中の魔力が魔法を使うように貯められていく。そして、俺の許容量に近づいて……

やばい！！

俺は一瞬で朱里に覆い被さった。魔力は何とか置き去りにして、空間に残したが、覆い被さった直ぐ後には、それが暴走するのが、感覚だけで手に取るようにわかった。

轟音が、聞こえた気がした。

同時に意識とかも全て吹っ飛び、浮遊感が残った。覆い被さると同時に掴んでいたのか、俺は朱里に覆い被さるような体勢となっていた。そして、俺たちは、街の隅へ落ちた。

街ではまだ轟々と、火が燃え上がっていたし、人が焼けた気持が悪くなるような匂いも漂っていた。それに気づいたのは夜のこと、いままで意識をずっと吹っ飛ばしていたらしいと気づいた。火は全てではないものの鎮火し始め、人は逃げる悲鳴から探す悲鳴に声を変えていた。

「あ……………れ？」

傍らには朱里が居た。城でのことを思い出すと同時に、なにをす

るのかは一瞬で決まった。ダイナマイト風にやろうと瞬間的に思ったが、魔力が欠乏していた。暴発するほどの魔力を残してきたのだ。回復するには数日かかるだろう。だが、もう回復することはない。俺は確信を持ってそう思っていた。

幸い民家の近くに落下していたので、シャベルをこつそりと頂戴する。それと同時に少し固いが、勇者補正のおかげでいとも容易く掘れる地面を掘っていく。

ザクザク……ザクザク……ドコー？……ゴウゴウ……ザクザク……

土を掘る音も、人を呼ぶ音も、炎の音も、全てが聞こえる。無心になっていくうちに、十分な深さを掘っていた。

「ご主人様……？ ご主人様ー！」

ソラが俺を捜してくれているらしい。だが、俺は答えない。そして、無心となっているうちに少し魔力は戻っていたようだ。ソラに魔法の伝令鳥で、さようなら、と連絡し、最後に使う用の魔力は残しておく。意識さえあれば、散らばった魔力は戻ると、最後の前に覚えたところで、何の意味もないと自覚する。傍らに置いていた朱里は、先に土の穴の中に入れた。

「一緒に……逝こうな……」

そうつぶやくと同時に、俺も穴の中へ飛び込んだ。

「《絶望の土くアペルピスイアギ》」

頭の上方にいきなり質量が増えたような気配を覚え、それが自分が出した土だと理解する。そして、俺と朱里は……

土に還った。

四十七話、l a s t e p i s o d e 世界の下へ（後書き）

世界を壊せや勇者様を今まで読んでいただき、ありがとうございます。

前作よりも、多くの人に読んでもらうことができ、とても嬉しいです。

これからは受験などで、少し投稿が遅れるかもしれませんが、出来るだけ次の話をかけるよう、努力します。

これからもよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9191w/>

世界を壊せや勇者様 ~ world is broken a man of valour ~

2011年11月5日17時32分発行